

金沢市

神 田 遺 跡

2 0 1 3

石 川 県 教 育 委 員 会

(財)石川県埋蔵文化財センター

神 田 遺 跡

2 0 1 3

石 川 県 教 育 委 員 会
(財)石川県埋蔵文化財センター



俯瞰（南から）



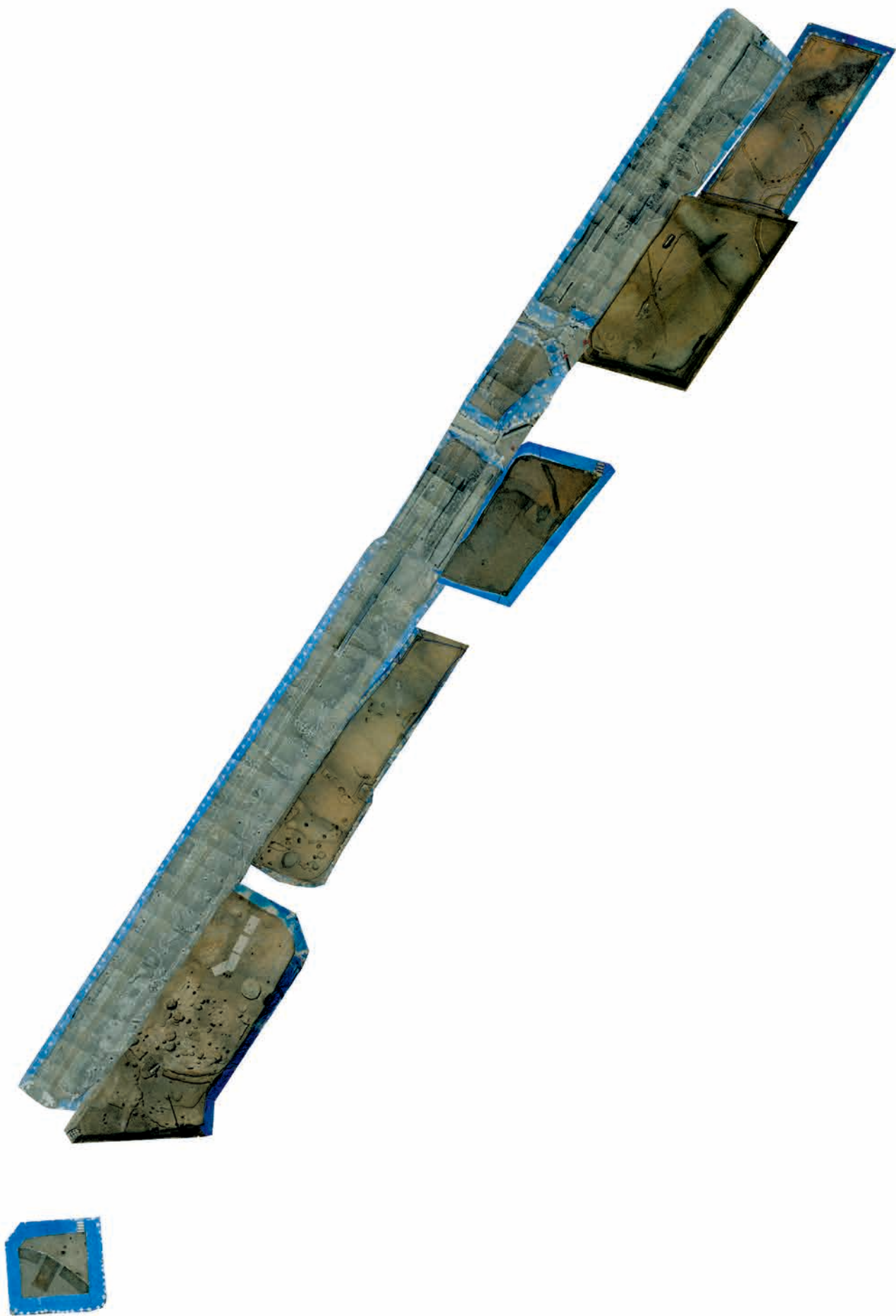
同上（南東から）



B区 SB01、SH01・02 完掘状況（南西から）



G区 SD19 完掘状況（南から）



平成 21・22 年度調査区オルソ写真（集成）



B区オルソ写真 (集成)



G区オルソ写真 (集成)

例 言

- 1 本書は神田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県金沢市神田2丁目地内である。
- 3 調査原因は北陸新幹線建設（金沢・白山総合車両基地（仮称）間）工事であり、同事業を所管する独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は、財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成21（2009）年度から平成24（2012）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成及び刊行である。
- 5 調査に係る費用は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が負担した。
- 6 現地調査は平成21年度から平成22（2010）年度に実施した。期間・面積・担当・担当者は下記のとおりである。
 - (1)第1次調査
 - 期 間 平成21年8月21日～同年10月27日、同年12月9日～平成22年1月21日
 - 面 積 1,520㎡
 - 担 当 調査部県関係調査グループ
 - 担 当 者 松山和彦（主幹）、稲葉浩一（嘱託調査員）
 - (2)第2次調査
 - 期 間 平成22年4月13日～同年6月25日
 - 面 積 1,040㎡
 - 担 当 調査部県関係調査グループ
 - 担 当 者 荒木麻理子（主任主事）、稲葉浩一（嘱託調査員）
- 7 出土品整理は平成23（2011）年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 8 報告書作成は平成23年度に実施し、特定事業調査グループが担当した。執筆は、松山和彦（企画部資料管理グループリーダー）の協力を得て、荒木麻理子（県関係調査グループ主任主事）が行った。報告書刊行は平成24年度に実施し、特定事業調査グループが担当した。
- 9 調査には下記の機関の協力を得た。

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、西日本旅客鉄道株式会社金沢支社金沢保線区、金沢市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1)方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。なお、座標は平成23年3月11日の東日本大震災前のものである。
 - (2)水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3)出土遺物番号は挿図、写真とで対応する。

目 次

第1章 経 過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	5
第3章 遺 構(平成21・22年度)	6
第1節 平成21年度調査区	6
第2節 平成22年度調査区	10
第4章 遺 物(平成21・22年度)	27
第1節 平成21年度出土遺物	27
第2節 平成22年度出土遺物	28
第5章 総 括	37

挿図目次

第1図	調査区区分図	1	第15図	平成22年度調査遺構土層断面図	21
第2図	試掘坑・工事立会位置図	4	第16図	平成22年度調査区全体図	22
第3図	神田遺跡の位置	5	第17図	平成22年度調査A区遺構図	23
第4図	周辺の遺跡分布図	12	第18図	平成22年度調査A・B区遺構図1	24
第5図	平成21・22年度調査合成図	13	第19図	平成22年度調査A・B区遺構図2	25
第6図	平成21年度調査A区平面図	13	第20図	平成22年度調査B区遺構図2	26
第7図	平成21年度調査C・D・E区平面図	13	第21図	平成21年度調査土器実測図1	29
第8図	平成21年度調査B区平面図	14	第22図	平成21年度調査土器実測図2	30
第9図	平成21年度調査F・G区平面図	15	第23図	平成21年度調査土器実測図3	31
第10図	SB01、SD01・02・06平面図	16	第24図	平成21・22年度調査遺物実測図	32
第11図	SH01・02平面図	17	第25図	平成22年度調査土器実測図1	33
第12図	平成21年度調査B区遺構深度表示図	18	第26図	平成22年度調査土器実測図2	34
第13図	平成21年度調査土坑遺構図	19	第27図	平成21年度調査B区遺構変遷試案	39
第14図	平成21年度調査溝遺構図	20	第28図	神田遺跡景観復元案	40

表目次

第1表	調査・整理体制表	3	第3表	平成22年度調査区遺物観察表	36
第2表	平成21年度調査区土器観察表	35			

巻頭図版目次

平成22年度調査B区	平成21・22年度調査
巻頭図版1 俯瞰（南から）	巻頭図版3 調査区モザイク写真
俯瞰（南東から）	平成21年度調査
平成21年度調査	巻頭図版4 B区モザイク写真
巻頭図版2 B区SB01、SH01・02完掘状況（南西から）	G区モザイク写真
G区SD19完掘状況（南から）	

挿図目次

平成21年度調査

図版1 C・D区モザイク写真、E区モザイク写真、
F区モザイク写真

平成22年度調査

図版2 調査区モザイク写真、

平成21年度調査

図版3 A区全景(北東から)、B区南部全景、
B区SD03・04完掘状況、
B区SD03・04西畦土層(西から)、
B区SD03・04東畦土層(東から)、
B区SD08完掘状況、B区SD10完掘状況、
B区SD10土層断面

平成21年度調査B区

図版4 SK01完掘状況、SK01遺物出土状況、
SK01土層断面(西から)、SK04周辺完掘状況、
SK04遺物出土状況、SK04土層断面(西から)、
SK06完掘状況、SK07・09完掘状況

平成21年度調査

図版5 B区SK11完掘状況、B区SD11完掘状況、
C・D区全景(南西から)、C・D区南部全景(西から)、
C・D区SK13土層断面、C・D区SK15完掘状況、
C・D区SK15土層断面、C・D区SK20遺物出土状況

平成21年度調査

図版6 C・D区SD22完掘状況、C・D区SD22土層断面、
C・D区SD24土層断面、C・D区SD25土層断面、
E区全景(南西から)、E区SD12完掘状況、
E区SD13・14完掘状況、E区SD13・14土層断面

平成21年度調査

図版7 E区SD14土層断面、F区全景(北東から)、
F区SD15完掘状況、F区SD15須恵器出土状況、
F区SD15土層断面(南東側調査区壁)、
F区SD15土層断面(北西側調査区壁)、
F区SD16完掘状況(南東から)、F区SD16土層断面

平成21年度調査

図版8 F区SD18・19完掘状況、F区SX03完掘状況、
F区SX04完掘状況、G区全景(南西から)、
G区SD19土層断面(南西側)、
G区SD19土層断面(南東側)、
G区SD19土層断面(北西側)、G区SD15完掘状況

平成22年度調査

図版9 A区全景(南西から)、B区俯瞰(東から)

平成22年度調査A区

図版10 SD01・SK04完掘状況、SD01土層断面、
SD02完掘状況(西から)、
SD02遺物出土状況(西から)、
SD02土層断面、SD04遺物出土状況、
SK01土層断面、SK02土層断面

平成22年度調査A区

図版11 SK03土層断面、SK04遺物出土状況、
SK04土層断面、SX01遺物出土状況、
SX02完掘状況、SX02土層断面(南北畦)、
SX02土層断面(東西畦)、SX13土層断面

平成22年度調査

図版12 A区P01土層断面、A区P02土層断面、
A区P32土層断面、A区P33土層断面、
A区P54土層断面、A区P58土層断面、
B区SD04～SX02完掘状況、
B区SD07完掘状況

平成21年度出土遺物

図版13 出土土器(1～30)

図版14 出土土器・石器(33～63)

平成21・22年度出土遺物

図版15 出土土器・石器(64～85)

平成22年度出土遺物

図版16 出土土器(86～109)

第1章 経 過

第1節 調査の経過

神田遺跡の調査は、鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、機構）を事業者とする北陸新幹線建設事業に伴い、石川県教育委員会（以下、県教委）及び（財）石川県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）により実施されたものである。県教委は事業者からの埋蔵文化財包蔵地に関する問合せに対し、工事に先立って、工事計画範囲における周地の埋蔵文化財包蔵地外の箇所においても、必要と判断される場合には試掘を実施して埋蔵文化財の把握に努めるべきとの意見を述べた。双方の協議により、用地買収が済み、試掘条件が整った場所から、試掘等が実施されることとなった。

平成21年度 神田遺跡はこの試掘等の調査により新たに確認された埋蔵文化財包蔵地であり、県教委はこの旨事業者に回答した。その後、事業者から3月13日、文化財保護法第94条に基づく発掘通知が県教委あて提出され、それに対し県教委は3月18日、発掘調査等の保護措置が必要となる旨事業者あてに通知し、事業者から県教育長あてに依頼のあった範囲の発掘調査を平成21年度に実施することになった。なお、石川県教育委員会文化財課（以下、文化財課）は発掘調査区に挟まれた市道部分の工事立会を2月11日に行った。

平成22年度 平成21年度は市道部分以外の範囲の発掘調査を行った。事業者は3月16日に平成21年度調査区に隣接する市道部分の発掘通知を提出し、市道部分の発掘調査を平成22年度に実施することになった。

第2節 発掘作業の経過

平成21年度 3月26日に事業者から県教育長あてに発掘調査依頼のあった範囲について、発掘調査を実施することとなった。4月1日に石川県と事業者、石川県と県埋文センターにて神田遺跡発掘調査の委託契約を締結した。県埋文センターは文化財保護法第92条に基づく発掘調査届を県教委に提出し、8月7日に県教委は文化財保護法の趣旨を尊重し慎重に実施する旨の通知を県埋文センターに出している。

8月下旬より現地調査の準備に着手、8月26日には文化財課・事業者を交え現地打合せを実施した。B区から調査にかかり、9月2日に重機による表土掘削の運びとなった。9月7日には作業員による遺構検出を開始して、概ね1週間で掘削を終えた。9月14日にはB区を対象に第1回の空中写真測量を実施した。9月14日にA区、同24日にE区の表土掘削後、漸次両区の掘削を進め、10月6日に空中写真測量を実施した。その後、台風通過があったが10月15日の表土掘削後、F区（稲刈り後に文化財課が試掘、センターに追加して調査を依頼）の掘削を進め、10月28日に同区を対象に第3回の空中写真測量を実施した。この時点をもって概ねA、B、E、F区の調査を終えたが、機構による用地取得等の事情で調査に着手できない箇所があったため、10月29日をもって一旦調査を中断した。

12月8日にG区（文化財課がF区の遺構分布状況等を判断し、県埋文センターに調査を追加依頼）の表土掘削をもって調査が再開された。9日より作業員による遺構検出に取りかかり、15日にC・D区の表土掘削、16日に表土掘削と並行してG区を対象とした第4回の空中写真測量を実施した。翌17日には文化財課によるG区の終了確認があった。18日にこの冬初めての降雪があり、除雪しつつ25日

まで遺構掘削を進めたが、年内には調査を終了できず、越年することになった。

平成22年は1月5日より作業員による掘削を開始した。1月6日にも再びまとまった降雪があったが除雪しつつ調査を進め、8日には概ね掘り上げることができた。12日にはC・D区を対象とした第5回の空中写真測量を実施、翌13日には文化財課・事業者を交え、現地引き渡しの協議を行った。

1月14日には3度目のまとまった降雪に見舞われ、撤収も難渋したが18日に発掘機材を搬出し、22日にはすべての撤収を終えた。

その後、県埋文センターでは遺失物法に基づく遺物の発見届を金沢中警察署に提出した。それを受けて金沢中警察署から金沢市教育委員会（以下、市教委）に対し文化財と認められる旨の埋蔵文化財提出書があり、市教委は出土品を文化財と認定している。

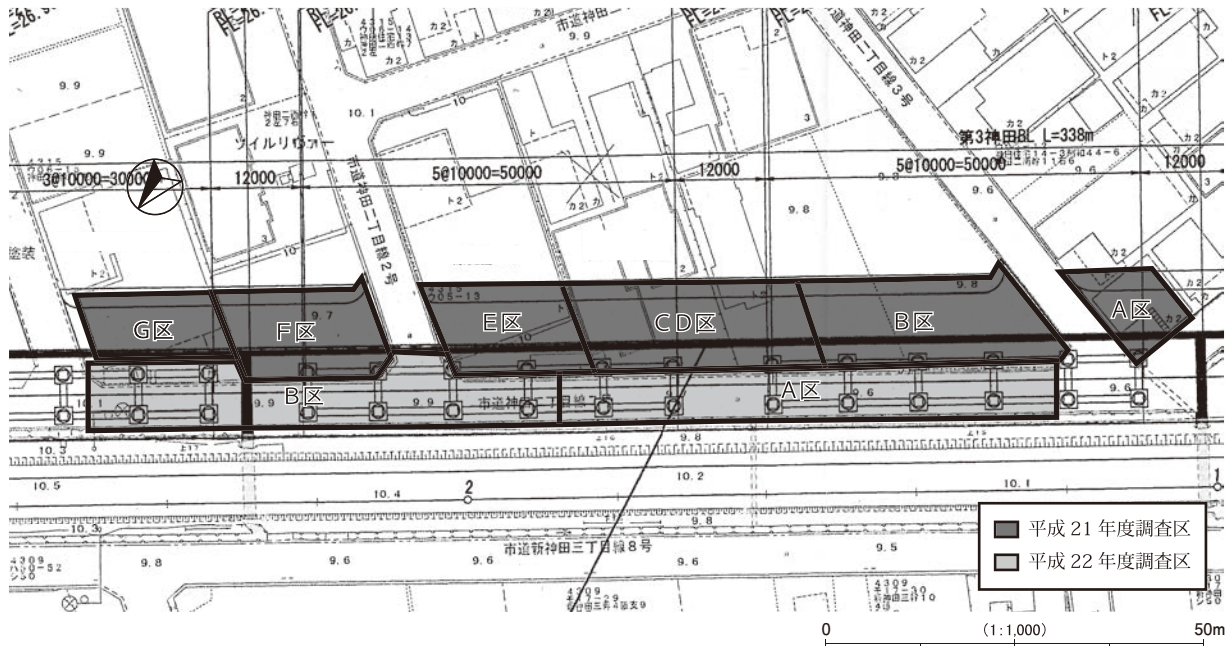
平成22年度 事業者から県教育長あてに発掘調査依頼のあった平成21年度調査区隣接地の範囲について発掘調査を実施することになった。4月1日には石川県と事業者、石川県と県埋文センターにて神田遺跡発掘調査の委託契約を締結した。県埋文センターは文化財保護法第92条に基づく発掘届を県教委に提出し、県教委は文化財保護法の趣旨を尊重し慎重に実施する旨の通知を県埋文センターに出している。

発掘調査は4月13日に着手した。同日、文化財課、事業者、県埋文センターによる現地協議を行い、調査区や調査着手時期、排土置場や仮設建物・駐車場の用地、現道に伴う横断水路の保護などについて確認した。その結果、調査は2回に分割（A・B区）して切りまわして実施すること、安全対策としての調査区周囲を囲むフェンスの設置、調査区内のコンクリート等の撤去に合わせた表土除去は事業者が実施し、その際、県埋文センターが立ち会うことが決まった。5月7日～11日、事業者によるA区の表土除去作業に立ち会った。5月12日、調査機材搬入。5月14日から遺構検出・掘削、写真撮影、実測を順次行い、弥生時代および古墳時代の遺構、遺物を確認した。5月25日、空中写真測量を実施して完掘状況の記録を行った。補足調査終了後の5月28日、文化財課による終了確認を受け、A区での作業を終了した。5月31日、事業者によるA区の埋め戻しに立ち会った。6月2・3日、事業者によるB区の表土除去に立ち会った。6月10日から遺構検出・掘削、写真撮影、実測を順次行い、弥生時代および古墳時代の遺構、遺物を確認した。6月17日、ラジオコントロールヘリコプターによる調査区の遠景写真を撮影、翌18日、空中写真測量を実施して完掘状況の記録を行った。6月20日、地元向けの現地説明会を実施し、25名が参加した。補足調査の終了後の6月22日、文化財課と事業者の担当の立会いで遺跡の引渡しを行った。機材・設備撤収後の6月25日に現地発掘調査の作業を完了した。

その後、平成21年度と同様に、県埋文センターでは遺失物法に基づく遺物の発見届を金沢中警察署に提出し、市教委から出土品の文化財認定を受けている。

第3節 整理等作業の経過

事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として、平成23・24年度に県埋文センターが実施した。平成23年度に平成21・22年両年度の出土品整理と報告書作成を実施し、平成24年度に報告書を刊行した。整理内容は、遺物の記名・分類・接合、実測・実測図トレースと、遺構実測図のトレースであり、担当は報告書作成とともに調査部特定事業調査グループである。



第1図 調査区区分図 (S=1/1,000)

◎調査体制

発掘調査年度	平成21 (2009) 年度	平成22 (2010) 年度
調査面積	1,520㎡	1,040㎡
現地調査期間	平成21年8月21日～同年10月27日 平成21年12月9日～平成22年1月21日	平成22年4月13日～同22年6月25日
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 中西吉明)	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 中西吉明 6/30まで、7/1から竹中博康)
総括	黒崎幸作 (専務理事)	黒崎幸作 (専務理事)
事務	栗山正文 (事務局長) 釜親利雄 (総務グループリーダー)	栗山正文 (事務局長) 釜親利雄 (総務グループリーダー)
調査	湯尻修平 (所長) 三浦純夫 (調査部長) 伊藤雅文 (県関係調査グループリーダー) 松山和彦 (県関係調査グループ主幹:担当) 稲葉浩一 (同囑託:担当)	三浦純夫 (所長) 福島正実 (調査部長) 伊藤雅文 (県関係調査グループリーダー) 荒木麻里子 (県関係調査グループ主任主事:担当) 稲葉浩一 (同囑託:担当)

◎整理体制

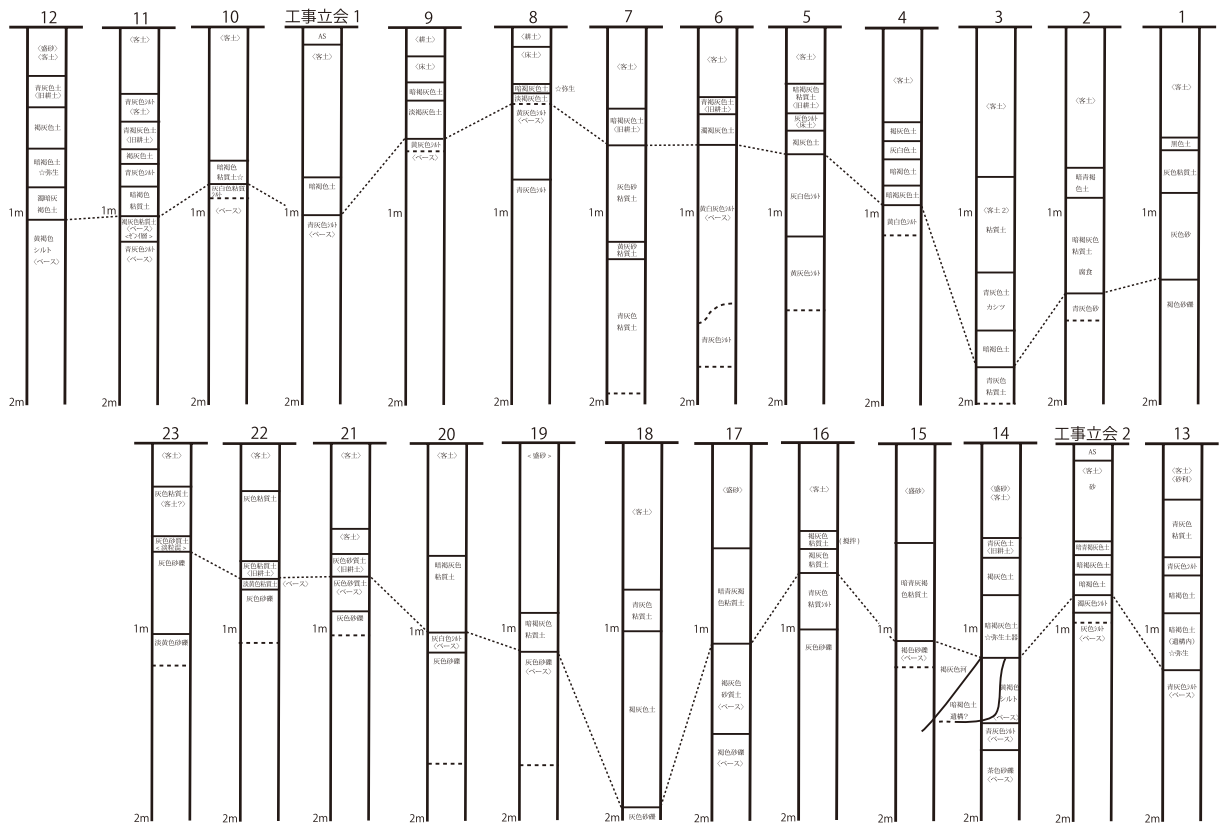
整理年度	平成23 (2011) 年度	平成24 (2012) 年度
整理内容	平成21・22年度出土品の整理 (記名・分類・接合、 実測・実測図トレース、遺構図トレース)、 報告書作成	報告書刊行
整理期間	平成23年4月1日～同年4月28日	
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 竹中博康)	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下公司)
総括	浜崎 洋 (専務理事)	岡田義彦 (専務理事)
事務	栗山正文 (事務局長) 浅香繁晴 (総務グループリーダー)	栗山正文 (事務局長) 山口 登 (総務グループリーダー)
整理	三浦純夫 (所長) 福島正実 (調査部長) 浜崎悟司 (特定事業調査グループリーダー)	三浦純夫 (所長) 福島正実 (調査部長) 浜崎悟司 (特定事業調査グループリーダー)

第1表 調査・整理体制表

第3節 整理等作業の経過



【試掘坑土層】



第2図 試掘坑・工事立会位置図 (S=1/2500)

第2章 遺跡の位置と環境

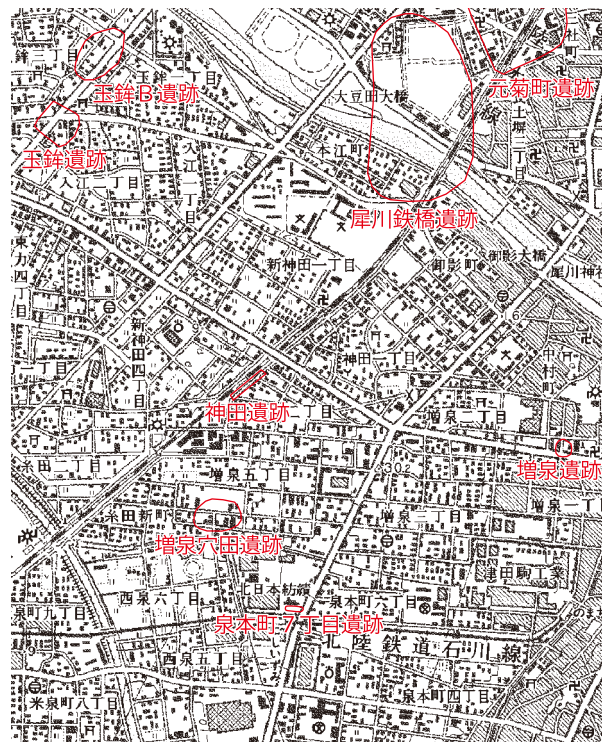
神田遺跡は金沢市街地を貫流する犀川中流左岸の標高10m前後の沖積低地に位置する。今回の調査地はJR北陸線の線路東側に隣接し、金沢駅からは西南に約2.5kmの距離にある。また、遺跡の約1km上流が泉野扇状地と低地との境目にあたり、それより下流左岸では分流の派生がみられる。それらは近世に農業用水として「泉用水」・「中村用水」(1705年以前に開削)、「高島用水」(1705年以後に開削)に再編整備され、今日に至っている。このうちの「中村用水」は、神田遺跡の南側を西に流れ、およそ1.5kmで伏見川に注ぐ。市街地化以前の地形図では用水に沿って10m等高線が東に入り込む状況が確認され、それは7.5m等高線でも同様である。このことは中村用水がかつての犀川左岸の分流河道を利用して整備されたことを物語っている。今回の調査でも遺跡の南端を画するように旧河道が検出されており(平成22年度A区のNR01)、用水として整備される以前の犀川分流とも推定される。



第3図 神田遺跡の位置

神田遺跡の立地を考える場合、犀川左岸分流の存在が重要な要因といえよう。

本遺跡周辺は昭和40年代以降、市街地化が進んだこともあり意外に周知の遺跡が少ない。南0.5kmに増泉穴田遺跡(弥生・古墳)、東1kmに増泉遺跡(平安)、北西1～1.5kmに玉鉾遺跡(古墳)、玉鉾B遺跡(奈良・平安)、また北東1kmに犀川鉄橋遺跡が知られる程度である。このうち、犀川鉄橋遺跡については1979・81・85年度に石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、縄文時代後期末(八日市新保式期)や古墳時代中期の遺物が出土している。本遺跡が近年の北陸新幹線建設工事に先立つ試掘調査ではじめて確認されたことからすれば、今後、周辺での新たな遺跡の発見も見込まれる。



第4図 周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)

※出典：石川県遺跡・文化財情報システム

なお、神田地区は近世の石川郡御供田村、明治期の米丸村の大字を経て、昭和10(1935)年に金沢市神田町へと変遷している。地名の由来は白山宮へ寄進された神田に由来するともいわれる。『加賀志徴』「土屋大学等館跡」では一向一揆時代に土豪土屋氏がこの地で館を構えたと伝える。

引用・参考文献

- 浅香年木ほか 1981『角川日本地名大辞典 17 石川県』角川書店
 米沢義光ほか 1982『金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター
 栃木英道ほか 1989『犀川鉄橋遺跡II』石川県立埋蔵文化財センター
 五味武臣 1993『泉用水』『石川県大百科事典』北國新聞社出版局
 五味武臣 1993『中村高島用水』『石川県大百科事典』北國新聞社出版局

第3章 遺構（平成21・22年度）

第1節 平成21年度調査区

1. はじめに（第1図）

調査範囲は北陸新幹線建設工事の本線部分に係り、JR北陸本線の線路山側に平行して線状にのびる調査区形状となっている。ここでは南西（西金沢駅寄り）のA区からはじめ、北東（金沢駅寄り）のG区まで、区ごとに状況を説明したい。

2. A区の遺構（第6図）

9×8mほどの狭小な調査区である。弥生時代の遺物包含層の堆積が認められる北東側半分は、後述のB区から続く弥生時代の集落域と考えられ、いくつかの小穴から土器が出土している。一方、南西側半分は旧河道（NR01）にあたる。覆土上層からは弥生土器が出土するが、それは流水により岸辺の遺物包含層が崩落したことに伴う二次的な移動に起因すると推定される。旧河道の年代は弥生時代集落の廃絶後として間違いないが、覆土中からは直接に年代を示す資料は得られていない。また、自然河道（犀川左岸の小さな分流）かそれを改変した用水路かという点に関しては、調査範囲が限られるため、結論を得ることができなかった。

3. B区の遺構（第8図）

遺構の分布密度が高く、弥生時代終末期の平地式建物や土抗が確認されており、この時期の集落域の中心部の一角にあたると判断される。

（1）掘立柱建物と平地式建物

B区では掘立柱建物（SB01）を囲む溝（SD08・10）と弧状に走る溝（SD03・04）がみられ、それぞれ、SD08・10は区画施設に伴う溝、SD03・04は平地式建物（SH01・02）の周堤外の周溝と考えられる。溝の切り合いからSD10→SD03→SD04の順に営まれたことが判明している。なお、いずれも周溝を部分的に検出したのみであり、全体プランや支柱穴の配置については推定復元による。

SB01（第10図）

外側に溝（SD08・10）を伴う掘立柱建物である。溝の平面形は隅丸形状になり、北側隅が途切れており、門状に並ぶ4基の柱穴（P42～44、P52）がある。P42～44、P52の深さは順に、40、29、28、41cmである。溝の外縁側で計測した規模は約12.0×10.5mで、溝の幅は50cm前後、深さは15cm程である。溝の弧の内側に沿っていくつかの小穴が並ぶようで、区画施設の柱かもしれない。掘立柱建物の柱穴と考えられるものは第10図に網かけしたもので、P25、45、47、48、49、62、89～91などである。それぞれの深さは順に、29、35、39、32、38、42、40、36、41cmである。掘立柱建物の一部は調査区外にかかり、規模は2×2間で約5.75×6.7mを測る。柱穴の直径は40cm前後のものが多く、深さは30cm以上あるものが多い。次に触れるSD03・04内の柱穴の深さは20cm代のものが主体なので、SB01の柱穴は比較的深いものが多い。

SD10の覆土は土層断面図に示したとおり黄灰色シルト系を主たる覆土とし、一部に灰褐色粘質土

がみられる。SD08の主たる覆土は茶灰色シルトである。SD10縁に存するP92～99は区画施設に関するものと考えられ、それぞれの深さは順に28、42、14、27、42、16、30、33cmである。

S H01・02（第11図）

近接して並走するSD03・04を周堤外周溝として想定される建物である。SD03・04の規模はともに幅60cm前後、深さ25cm前後を測り、円弧を描くものと考えられる。前者は外縁側で直径14.8m、後者も外縁側で直径16.1mに復元され、北～東側では周溝の延長部を確認できていない。2つの円周の中心はほぼ同位置であり、P15の約60cm南側にある。SD03・04には一部重複する箇所があり、2箇所において土層を記録した（第15図）。切り合いは先述のとおりSD03→SD04であり、建替えにより建物プランの拡張が想定される。支柱穴候補は、検出した小穴群の検討からP15・27・100の3基であり、やや東側にずれるが、P101も注意しなければならない。それぞれの深さは順に45、37、29cmであり、P101の深さは27cmである。P15、27の形状と深さは周辺の柱穴と比べて、特異なもので、柱穴底の形状は2つとも楕円形を呈し、板状の柱だった可能性があり、形状から柱規模を推察するとともに約20×10cmのものであろう。このような規模の楕円形を呈する底は他にみられないこと、深さも周辺のものとは10～20cm代の深さのものが多いことから、支柱穴の可能性は高い。類例は少ないが、2本支柱の建物として検討できるかもしれない。他に建替え時の支柱穴が認められないことから、支柱穴の位置を変えずに拡張したものであろう。

（2）土抗（第13図）

SK01～12の12基を検出した。SK01は208×198cmの不整な円形を呈し、深さは約30cmである。弥生土器がまとまって出土しており、土層については第13図に示した。底面は平坦である。瓢箪形のSK02は長さ128cm、最大幅104cm、深さ約20cmである。覆土は地山のシルトをベースとした濁淡灰褐色シルトである。SK03は1.4×1.0mの台形プランで概ね10cm前後の浅い土坑で北西に偏して40×30cmの楕円形のピット状の深い部分（深さ約30cm）がみられる。主たる覆土は地山質を主体とする濁暗黄灰色シルトで、深い部分のみ淡灰褐色シルトである。SK04は116×105cmの寸詰りな楕円形を呈し、土層については第12図に掲げた。深さは20cm弱である。180×90cm程の本体の南西側に溝状の張り出し部分が伴うSK05は、主たる覆土は濁淡灰褐色粘質土（黄褐色シルト混じる）で本体の北部で深さ10cm、同南部の最深部では55cmに及ぶ。SK06はSK04の南に接し、それに切られる。150×120cm程の楕円形を呈し、深さは25cm、主たる覆土は淡黄褐色粘質土で底面付近に薄く暗灰褐色粘質土が堆積する。西接するSK09を切るSK07は直径約90cmの略円形で、深さ20cm前後、主たる覆土は黒灰色粘質土である。220×70cmの長方形プランのSK08は深さ約30cmで、SD10から枝分かかれた短い溝に連続し、主たる覆土は黒灰色粘質土。SK09は100×80cm程の隅丸方形の土坑で、東端を相似形のSK07に切られる。深さは10数cmと概して浅いが、南に偏して深さ約30cmの深い部分が伴う。SD04を切るSK10は壁際で約半分が検出されたのみである。SD10とSD11の交点に掘り込まれたSK11は175×105cmの楕円形を呈し、底面の一角に礫が数個まとまって置かれた箇所が認められた。深さは20数cmで底面は平坦である。SD10を切っている可能性が高い。SK12は調査区南端に沿うSD07と重複する。深さは50cmを越えることが確認できるが、部分的な調査にとどまる。

（3）溝（第10・15図）

SD01～11（05は欠番）を検出しており、SD03・04・08・10については（1）で触れた。その他、SD01もSD06などとともにSH01の周溝を構成する可能性があるが断定はできない。SD01は幅約1.0m、深さは10cm未満と浅い。SD02についてもSK05の張り出し部とともに建物の周溝をなす可能性が指摘でき、幅約40cm、深さは5～15cmで北に行くほど深くなる。主たる覆土は濁淡灰褐色シル

トで、SD01を切る。長さ4m、幅1.2mほどのバナナ形の本体から枝状の部分が西に分岐するSD06は深さ20cm余りである。SD07は調査区南壁に沿って長さ2.3m分が検出されており、深さは10cm未満で浅い。SD11は南西からSD10に合流する溝で長さ3m弱が検出されている。幅60cmで深さ10cm余りである。

4. C・D区の遺構（第7図）

B区に接する南西半分は遺構密度が高く、弥生時代の集落域の続きと判断される。一方、E区に接する北東半分では遺構密度が急激に希薄となる。

（1）土抗

一部に形状から小穴に分類した方がよいものも含まれるが、調査時の区分に従って記述する。北西部が調査されているSK13は、確認される長さが2m余り、幅が90cm程である。検出面からの深さは30cmである。土層については第12図に示した。底面に粗砂の堆積が認められたため、たちわりを実施したが、地山である可能性が高いと判断された。SK14は径140cm程の不整な円形を呈し、深さは10数cm程。覆土は大粒の炭粒が混じる暗灰褐色粘質土で、南東3mにある小穴P82と共通する。なお、P83の覆土は濁黄褐色粘質土でこれら二者とは異なる。SD21を切り込むSK15は1.65×1.5m程の楕円形を呈し、深さは30cm程である。土層については第12図に示した。

SK16・17はSD24を切り込む。前者は淡茶灰褐色粘質土を覆土とし、深さは10数cm、後者は濁暗灰褐色粘質土（下層は）を覆土とし、深さは20cm余りである。SD22を切り込むSK18の深さは20cm弱。SK19の深さは10cm余りで南東部のみが調査されている。またSD25を切り込むSK20では大きな炭塊が混じる暗灰褐色粘質土からなる覆土中から多量の土器が出土している。深さは25cm程、検出面では径70cm程の円形に復元できよう。SK21はL字状をなすSD21の北端を切り込む。SK21は約70×60cmの楕円形を呈し、深さは30cm前後である。

（2）溝

B区寄り（西側）から記述する。北西から続く溝の端部と考えられるSD20は、幅40cm、深さ数cmの浅い溝である。SD21は幅60cm、深さ10数cm前後で、南端部がL字状に短く折れる。SD22は北に行くに従って幅が1mから2.5m以上に広がる。2条に分岐する可能性も考えられる。深さは30cm前後で、土層は第15図に示した。北西からの流れが折れ曲がって東に向かうSD24は幅1.0～1.2m、深さは20cm弱である。覆土は地山質を主体とする淡黄灰色粘砂である。SD25は南からのびる溝の先端部と考えられる。先端部付近では幅60～70cm、深さ10数cm、覆土は地山ブロックが混じる濁暗灰褐色粘質土である。また、C・D区のやや東寄り、SK13の北西で弧状に走るSD101がみられる。幅20～30cmで、深さは数cmに過ぎないが、B区の例から住居に伴うものである可能性も考慮される。

5. E区の遺構（第7図）

数条の溝や小穴などが検出されているが、遺構密度は概して希薄といえる。溝ではE区の北寄りを横断し北西に向かうSD13がみられ、それから分岐したとも推定されるSD14が北に向かって流れる。前者は調査区南壁付近では幅2m近くと比較的広いが、北壁の手前で向きを西に変えたとともに、幅を70cm程に狭め、再び広がるようである。深さは10cm前後と浅いが、土層断面図を作成した南壁付近では20cm前後とやや深い。土層図（第15図）からは上層では粘質土が主体、下層ではシルト主体であることが看取される。SD14の流路にあたる部分（第12・13層）にはシルト質の覆土がみられ、後述

のようにS D14の覆土が粘質土によって占められることを勘案すれば、あるいはこの地点ではS D14は分岐しきっておらず、いまだS D13との一体性が高いとも判断される。一方、S D14は70cm前後で、南側のS D13に接するところは浅いが、やや北において一段深くなり深さ30cm前後を保つ。断面は箱堀状であり、粘質土系の覆土が卓越する（第15図）。

その他S D12は幅20cm、深さ5cm程度で、黒灰色粘質土を覆土とし、形状は直線的である。長さ1.6m分を確認している。この溝に切られる濁黒灰色粘質土（S D12に近似）を覆土とする浅く不定形な落ち込み（長さ3.4m以上、幅60cm以上、深さ10cm未満）が北東部の壁際で見られる。小穴については10基ほどあり、灰褐色粘質土を覆土とするものが多い。明確に柱穴といえるものは見当たらない。

6. F区の遺構（第9図）

東寄りに北北西に向かって流れる大溝・S D16がある。幅約3.5m、深さは70cm前後である。土層については第15図に示した。粘質土が主体であり、砂質土は下層上部に少しみられる程度（第8～10層）である。また流水の特徴ともいえる粗砂も確認できず、あるいは恒常的に水が流れる性格の溝ではなかったとも考えられる。下層から古墳時代前期の土器（第24図60）が出土しており、機能した年代を探る手がかりとなる。また左右兩岸の肩付近に2基ずつ計4基の小穴がみられ、橋などの構造物に関連するものと推定される。また、右岸では大溝から幅50cm、深さ数cmの溝が分岐するようである。ただしS D17に顕著な流水痕がみられないことからすれば、S D16に排水する溝とも考えられる。

また、北東隅で弧状をなす溝・S D15が検出され、その延長がG区で検出・調査されている。同一の遺構であるため、ここでまとめて扱うことにしたい。F区側では直径約11.7mの円形の溝の一部と判断されたが、G区側の成果とあわせてみれば、必ずしもそうとは言い切れない。何らかの周溝の一部である可能性は残るものの、全体プランは不詳である。F区側では幅50cm、深さ20cm程と一定性が認められるが、G区側では幅50～130cmとばらつきがある。土層についてはF区の壁面2箇所記録した（第14図）。ともに上層の黒灰色粘質土が特徴的であり、そこから須恵器杯身の完形品が出土している（第24図62）。中～下層にかけては灰褐色粘質土や黄褐色系シルトの堆積がみられる。

大溝S D16の西側には直線的に走る2条の溝（S D17・18）がある。それらは交差しており、S D17をS D18が切る。前者の幅は20～50cmと一定せず、しかも途切れ途切れである。南西から北東に向かい、北端はS D16で確認できない。検出時に両者の切り合いが明確でなかったことからすれば同時併存の可能性も残る。覆土は暗灰褐色粘土ブロックを含む黄褐色の砂によって占められる。一方、S D18は途切れることなく、南北に走る。主軸方向は真北からやや東に振れる。覆土は砂混じりの暗灰褐色粘質土である。

その他、南西隅と東南隅の2箇所落ち込み部分（S X03・04）がみられた。部分的な検出にとどまるので性格は不詳である。両者の主たる覆土は粘性が強い暗灰褐色粘質土である。なお重複するS D18とS X03の切り合いについては覆土がともに暗灰褐色粘質土であるため、把握することができなかった。

7. G区の遺構（第9図）

方形状にめぐる溝・S D19を検出している。西辺と東辺の距離は外法で6.2m、内法で5.1m程である。北辺が近代の用水によって失われてしまっているため、南北2辺の間隔は不明であるが、東西辺のそれに近いと推測される。性格については2基1対の小穴がみられ、それを支柱穴とする竪穴建物が想定できる。その場合、S D19は壁際の溝になろうか。土層については東西南の3辺で記録した（第

14図)。まず、西辺では幅40cm、深さ15cm余りで、主たる覆土はオリーブ灰色粘質土である。断面形は半円状を呈する。南辺では幅65cm、深さ15cmの断面半円形の本体部の内側に幅20cmの浅いテラスが伴う。主たる覆土は灰褐色粘質土である。東辺では幅60cm、深さ30cmと他に比べて深い。主たる覆土は暗灰褐色粘質土である。小穴についてはそれぞれ径15cm余り、深さ20cm弱である。

その他に3箇所落ち込みがみられる。SD19の東辺に接するSX06は長さ2.8m以上、幅約1.7mの楕円形と推定され、深さは数cmと浅く、主たる覆土は淡茶灰色粘質土である。北西隅を占めるSX07は深さ15cm前後で主たる覆土は暗茶灰色粘質土。SD15・19をつなぐSX08は深さ約10cm、覆土はSD19に近似する。

第2節 平成22年度調査区

1. 概要 (第5・16図)

調査範囲は現況道路の幅6～9.5m、延長125m、面積1,040㎡に及ぶ狭長なトレンチで、東辺で平成21年度調査区に接する。工事工程との調整で、調査範囲南半をA区、北半をB区として2回に分割して調査を実施した。調査範囲の大部分は上・下水道等による攪乱を受けており、遺構の残りは良好ではなかった。

調査にあたり、調査区の中心線を基軸に各調査区南端から10mごとにA1～7区、B1～6区まで任意のグリッドを設定した。

基本層序は、上から盛砂→青灰色および青褐灰色土の旧耕土→暗褐灰色土→灰黄色系シルトなどの地山となる。遺構の覆土は、黄灰色系のシルト及び粘質土である。

調査範囲は検出面レベルで8.8～9.3mを測り、北側ほど高くなる傾向にある。遺構密度は北側ほど希薄になる傾向にあり、遺構に伴う遺物は少量だが、弥生時代終末期を中心とするものが見られた。

2. A区の遺構 (第17～19図)

SD01 幅30～80cm、深さ7～20cm。P37を切る。溝底レベルは北側から南側へ向かって低くなる傾向にある。弥生時代終末期の遺物が出土している。

SD02 幅50～100cm、深さ約20cm。平成21年度調査区で延長を確認できなかった。弥生時代終末期の遺物が出土している。

SD03 幅40～70cm、深さ約20cm。緩やかに蛇行し、SD11・P22と重複する。

SD04 幅40cm、深さ10～30cm。平成21年度調査区で延長を確認できなかった。弥生時代終末期の遺物が出土している。

SD05 幅30cm、深さ10～20cm。平成21年度調査区で延長を確認できなかった。P24と重複する。

SD06 幅約40cm、深さ約25cm。平成21年度調査区で延長を確認できなかった。

SD07・SX12 P25も含めて一連の溝か。幅40cm、深さ10～15cm。

SD08 幅35cm、深さ約5cm。溝底レベルは北側から南側に向かって低くなる傾向にある。

SD09・SD10 攪乱を受け確認できないが、一連の溝とみられる。幅30～60cm、深さ5～15cm。

SD11 幅30～60cm、深さ約25cm。SD03と重複し、SK02に切られる。

SK01 調査区端にかかり、全形は不明。径91cm、深さ約30cmを測る。

SK02 延長を平成21年度B区で確認。長径96cm、短径87cmの平面不整楕円形で、深さ約45cmを測り、

S D11を切る。弥生時代終末期の遺物が出土している。

S K03 長径76cm、短径70cmの平面楕円形状で、深さ約25cm。

S K04 調査区端にかかり、全形は不明。深さ約30cmでS D01を切る。弥生時代終末期の遺物が出土している。

S X01 長さ90cm、深さ約20cm。攪乱を受けたため全形は不明だが、小穴状の遺構か。弥生時代終末期の遺物が出土している。

S X02 攪乱を受け全形は不明。長径5.1m、テラス状部分の深さ約10cm、最深部の深さ約50cmの土坑状。弥生時代終末期の遺物が出土している。

S X03 深さ約20cm。調査区端で一部が検出されたのみである。

S X04～S X09、S X14、S X16

いずれも深さ10～40cm程度の浅い落ち込み状を呈する。弥生時代終末期の遺物が出土している。

S X10 一部のみ検出。溝状の落ち込みで、幅1.3～1.8m、深さ15～30cmを測る。

S X11・13 攪乱により確認できないが、一連の溝状遺構か。幅65cm～2.1m、深さ15～28cm。S D01を切る。

S X15 平成21年度E区S D13とつながる可能性はある。深さ約15cm。

ピット A区では一定数見られるものの、建物柱穴を構成すると見られるものは未確認。弥生時代終末期の遺物が出土している。

3. B区の遺構（第18～20区）

S D03 一部のみ検出。幅35～60cm、深さ約10cm。

S D04 幅2.6～4.0m、深さ12～26cm。平成21年度F区のS D16とつながる可能性はある。S X02と重複する。96を図化した、同一個体がS X02でも出土している。出土遺物は少ないが、弥生時代終末期のものが出土している。

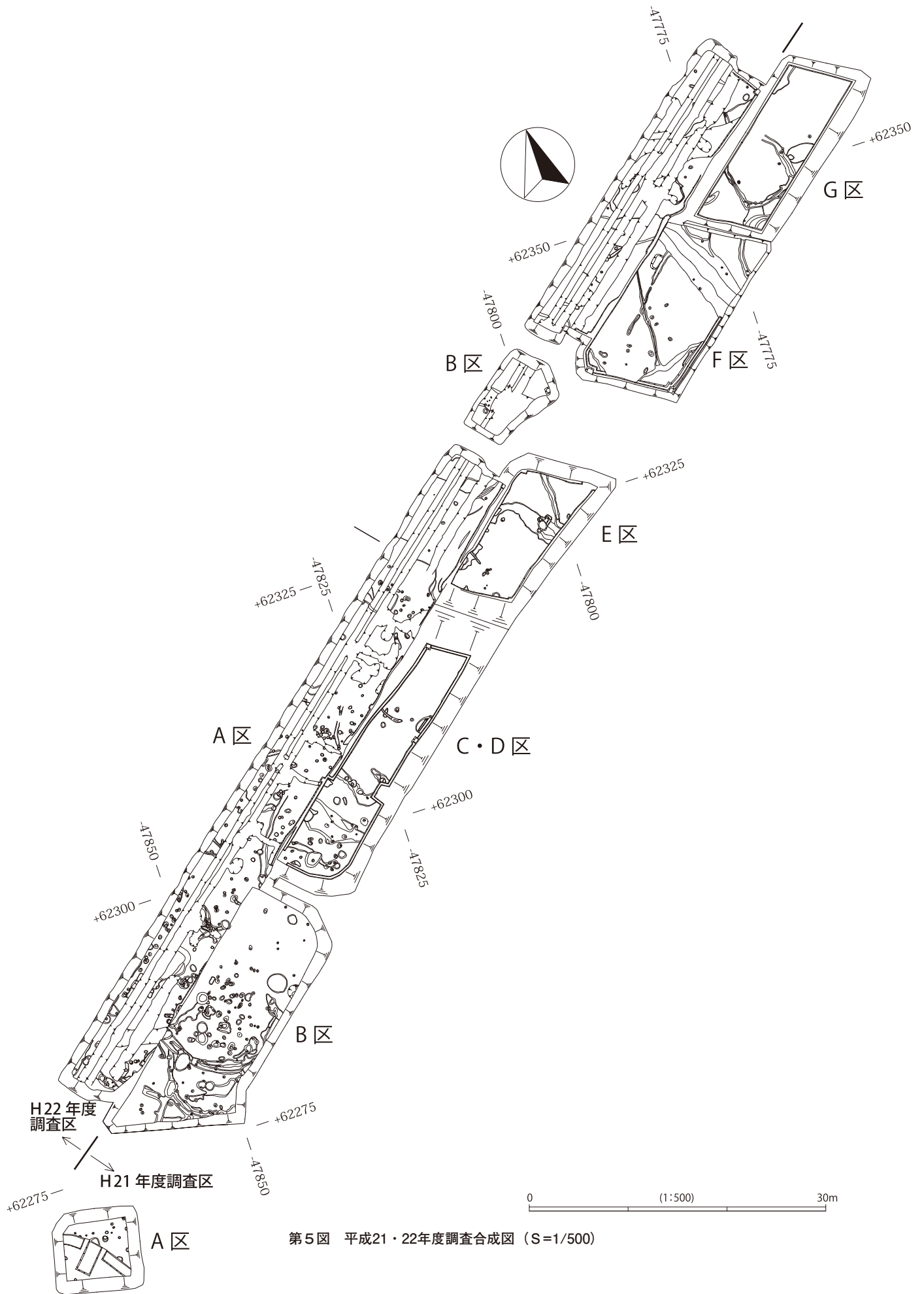
S D05 S D06と重複。A区S X15および平成21年度E区S D13とつながる可能性はある。弥生時代終末期の遺物が出土している。

S D06 流路の方向から、平成21年度F区S X03に続く可能性があるが、隣接する平成21年度E区では確認できない。幅7.2～8.3m、深さ約30～40cm。弥生時代終末期の遺物が出土している。

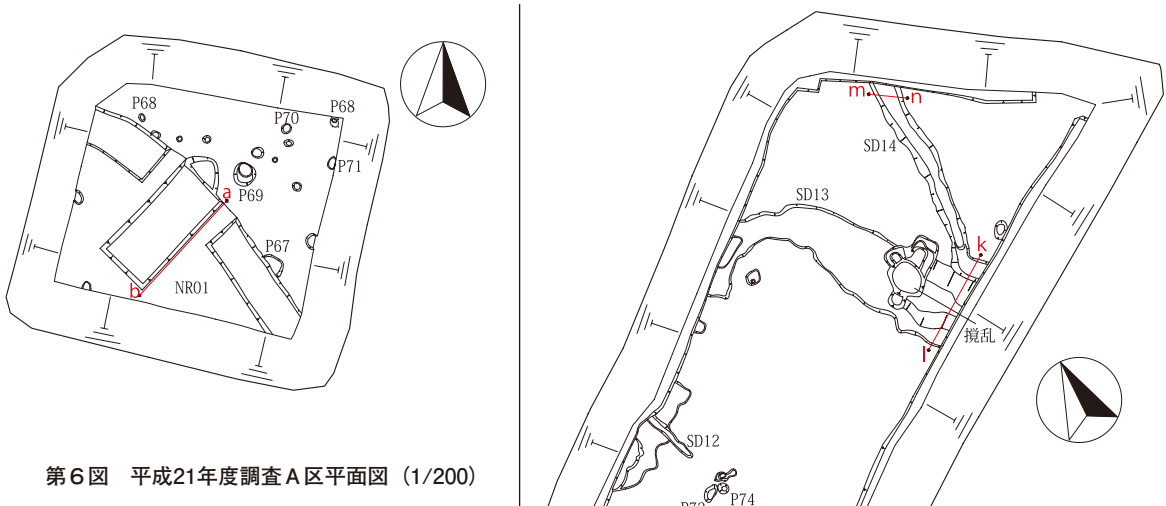
S D07 攪乱のため一部のみ検出。深さ約25cm。

S X01・03 深さ10～30cm程度の落ち込み状を呈する。弥生時代終末期の遺物が出土している。

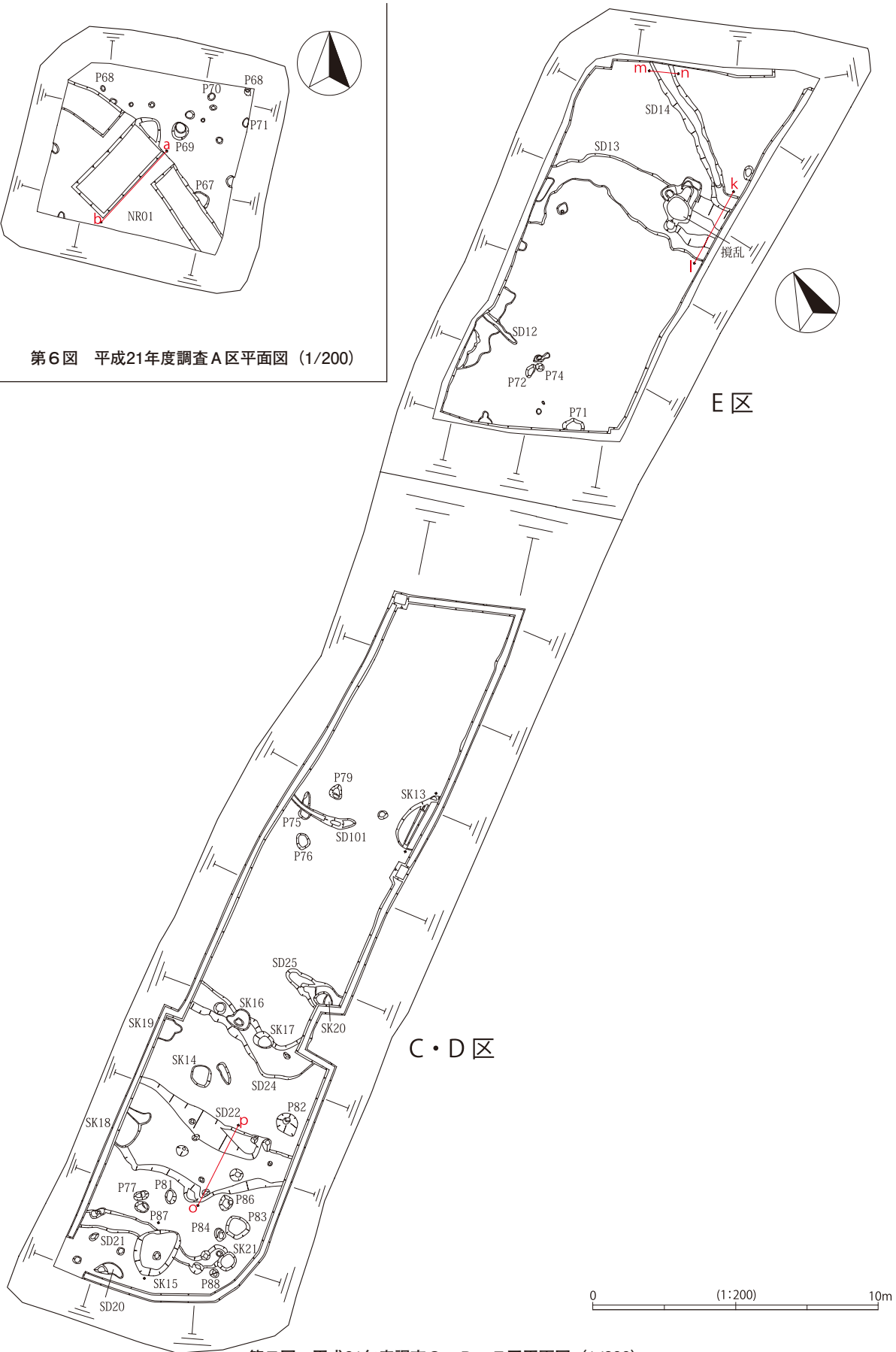
S X02 平成21年度F区S X04に続くと見られる。深さ20～50cm。S D04と重複する。弥生時代終末期の遺物が出土している。



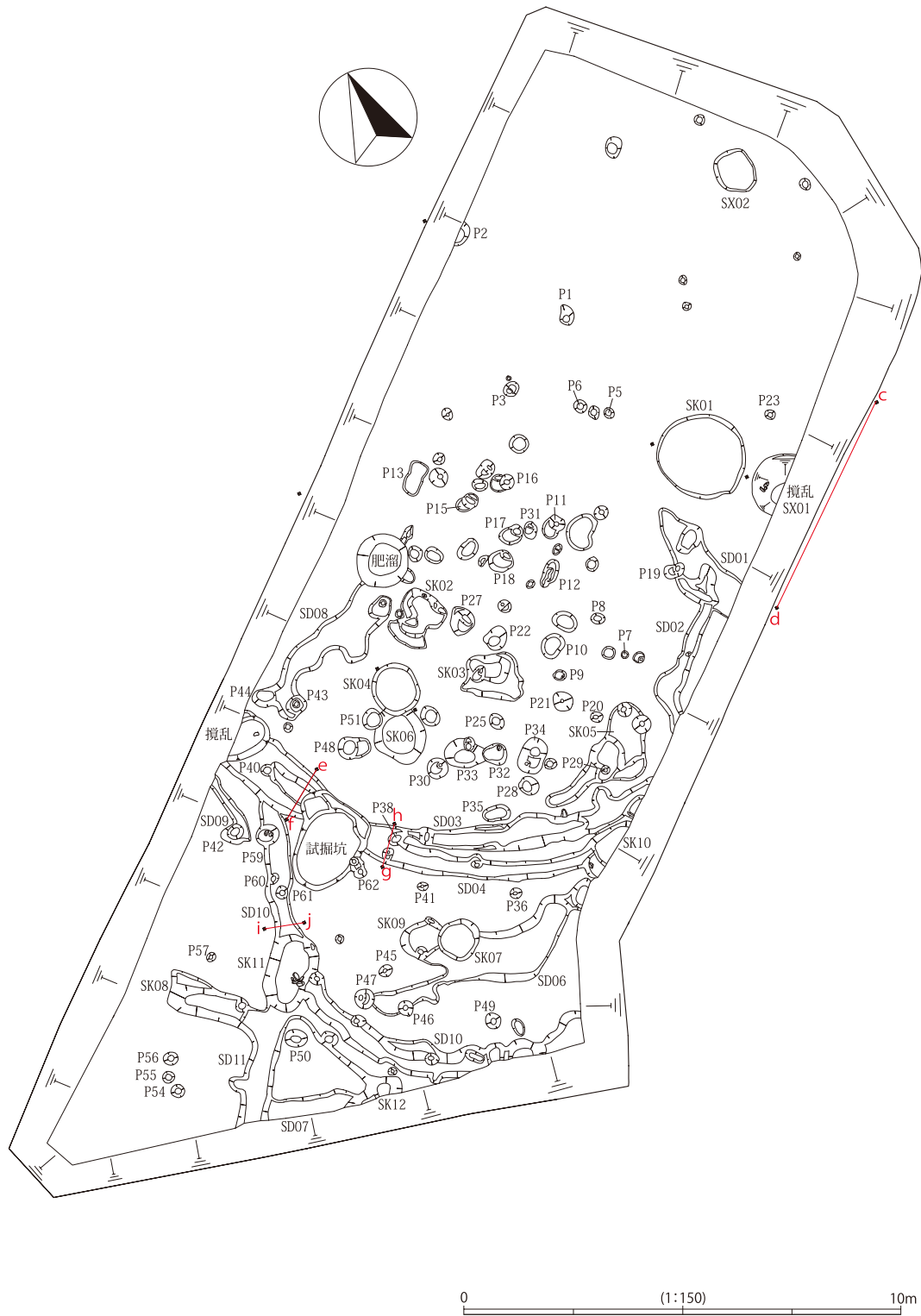
第5図 平成21・22年度調査合成図 (S=1/500)



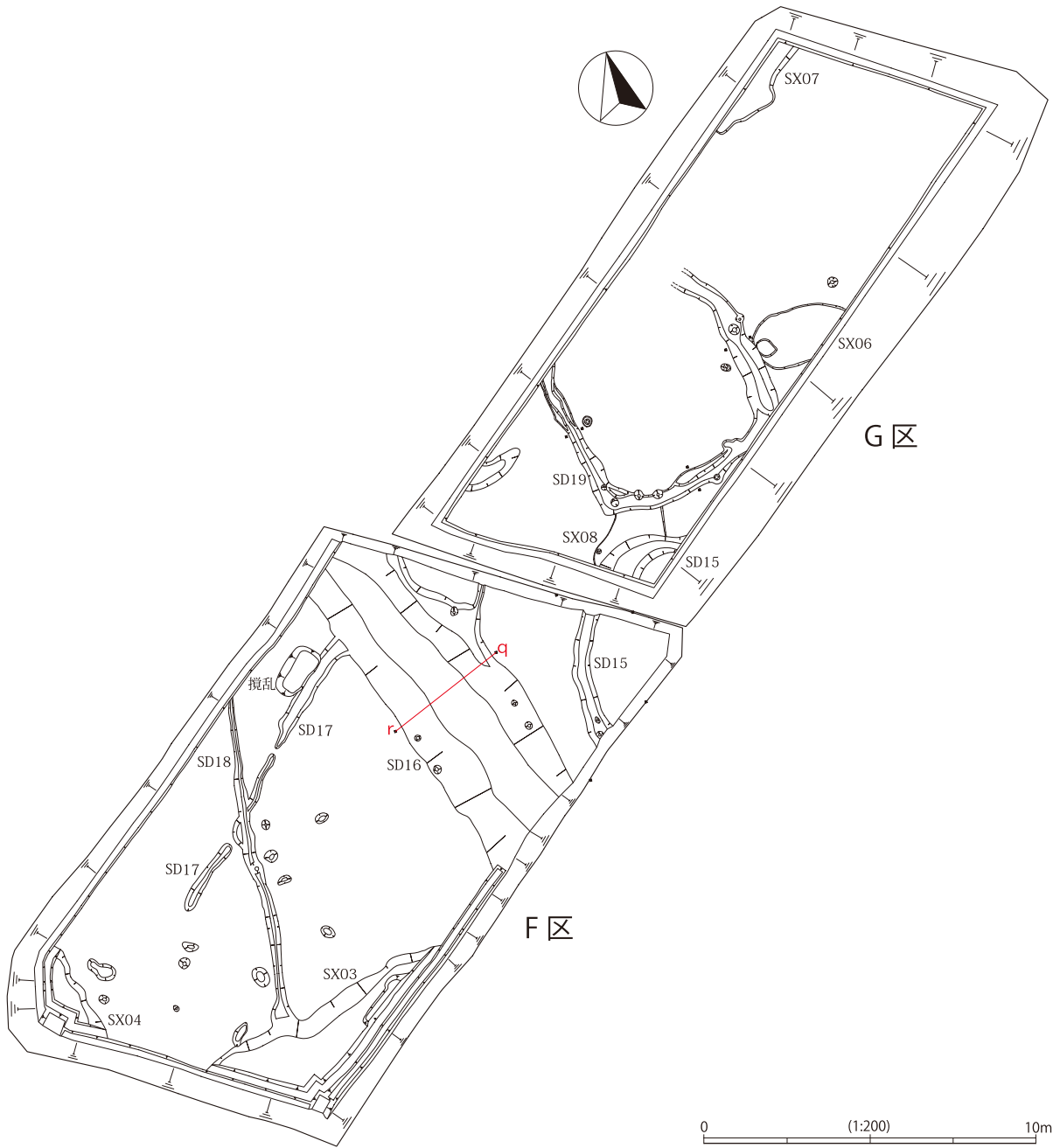
第6図 平成21年度調査A区平面図 (1/200)



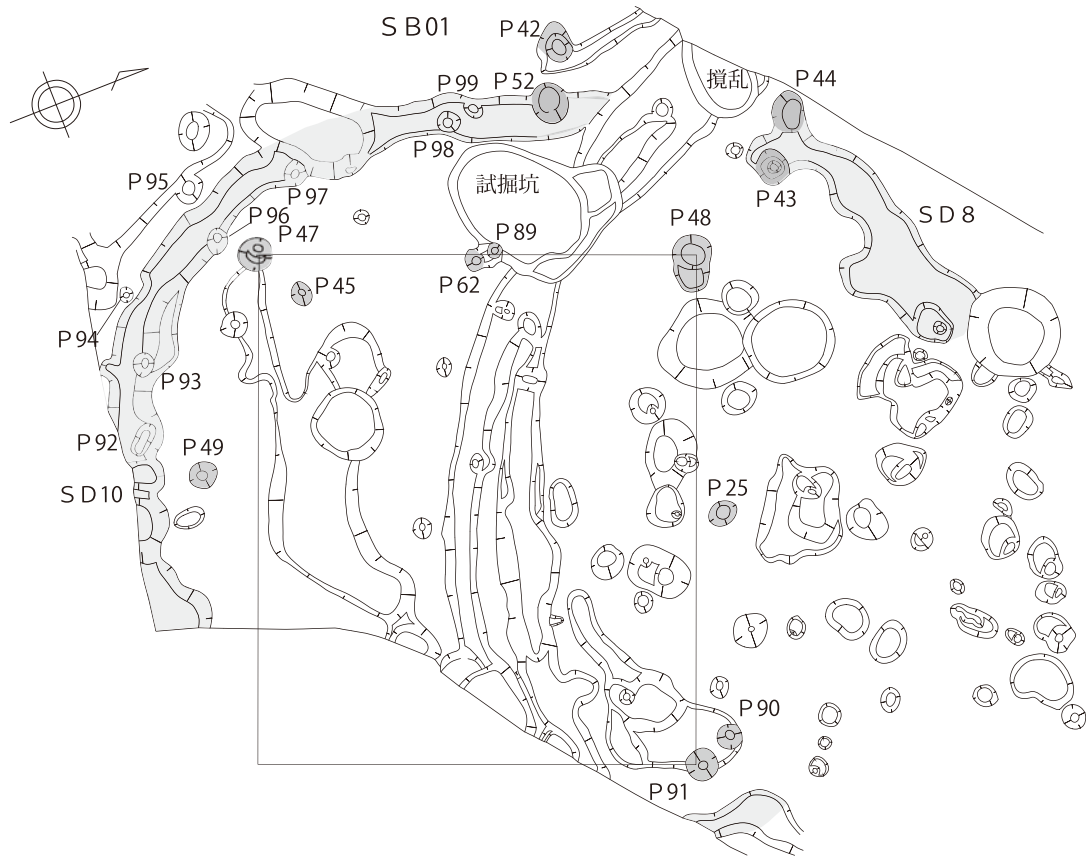
第7図 平成21年度調査C・D・E区平面図 (1/200)



第8図 平成21年度調査B区平面図 (S=1/150)



第9図 平成21年度調査F・G区平面図 (S=1/200)



SD01・02・06



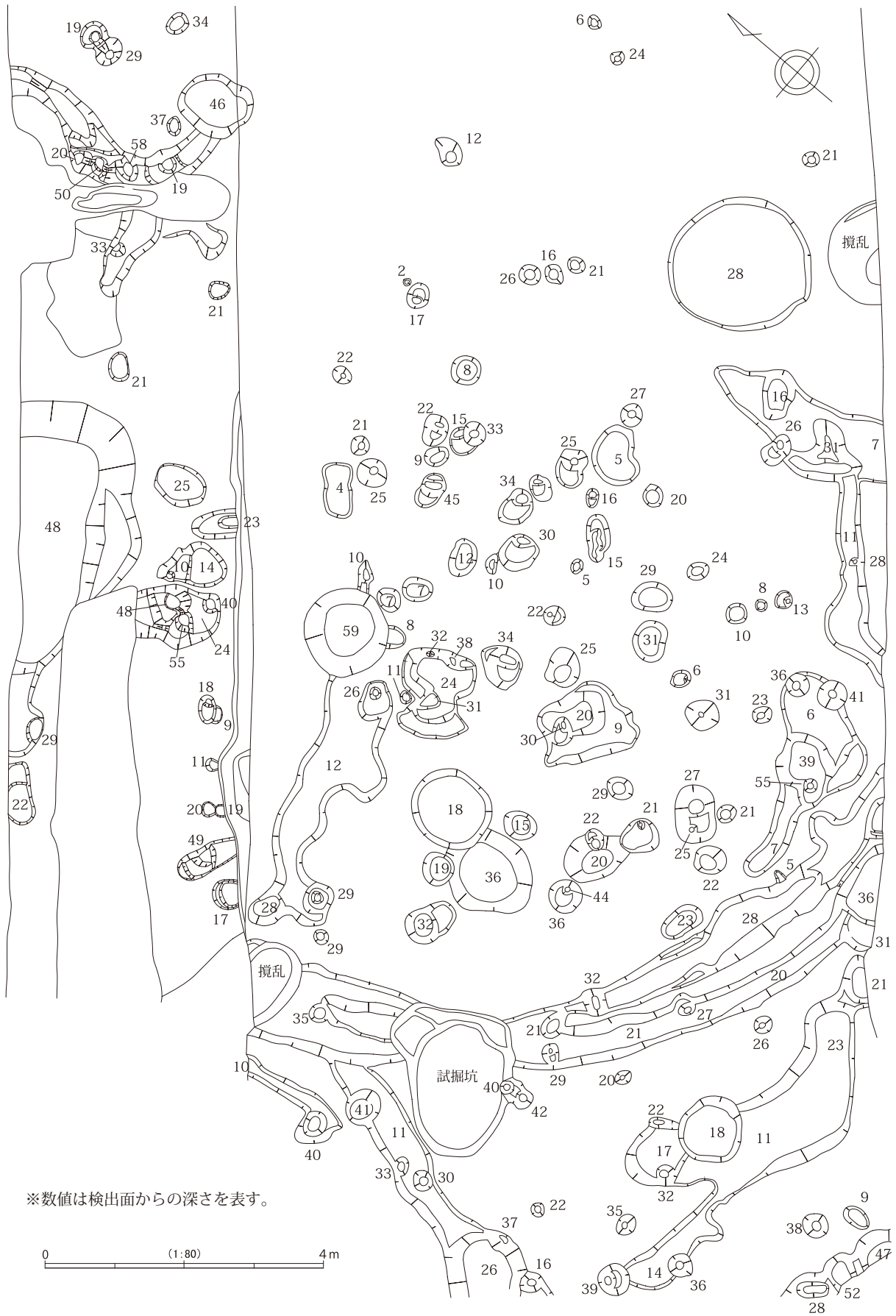
0 (1:100) 5m

第10図 SB01、SD01・02・06平面図 (S=1/100)

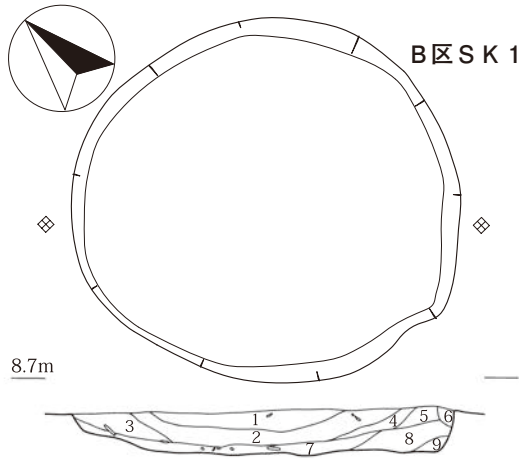
SH01・02



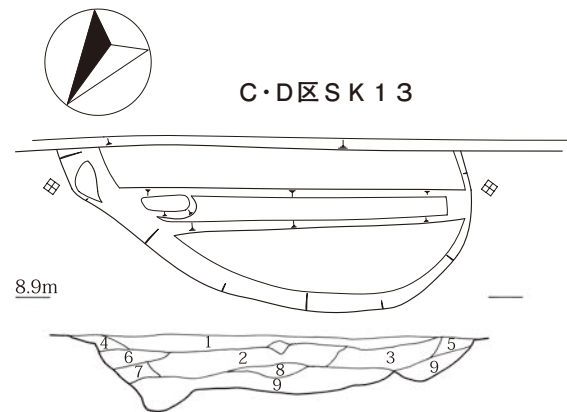
第11図 第11図 SH01・02平面図 (S=1/100)



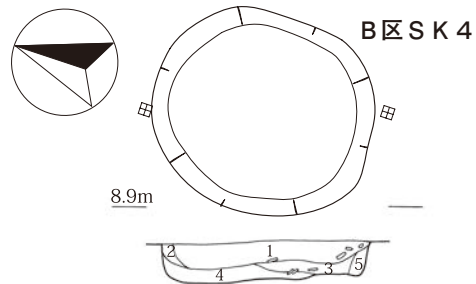
第12図 平成21年度調査B区遺構深度表示図 (S=1/80)



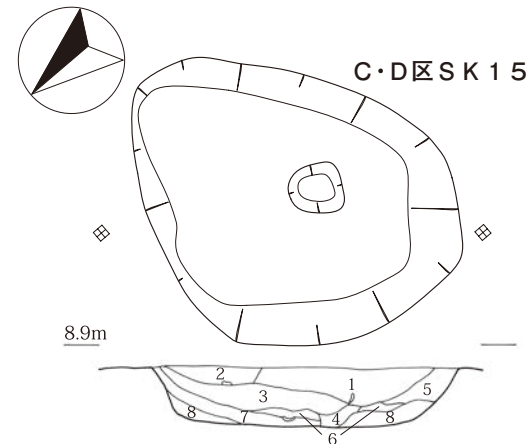
- 1 濁暗灰白色砂質土 (焼土塊含む)
- 2 淡暗灰褐色砂質土 (炭化物含む)
- 3 濁淡オリブ灰色シルト (地山質主体、暗灰褐色粘土ブロック)
- 4 淡黒灰色粘質土
- 5 淡暗灰褐色砂質土 (2と同じ色調、炭化物含まない)
- 6 淡黄白色粘質土 (崩落した地山)
- 7 黒灰色砂質土 (粗砂含む、地山粒・炭粒少量)
- 8 濁淡黒灰色粘質土 (地山粒を繚状に含む・炭粒)
- 9 黄褐色粗砂 (ベースか)



- 1 暗灰白色粘質土 (炭粒)
- 2 濁灰白色粘質土 (炭粒・地山ブロック)
- 3 黄褐色粘砂 (粗砂主体、灰色粘土ブロック)
- 4 濁黄灰色粘砂 (地山の砂質土主体、灰色粘土ブロック)
- 5 淡暗灰白色粘砂
- 6 暗灰褐色粘質土 (下端に厚さ1cmの黒色帯)
- 7 濁濃暗灰褐色粘質土 (上部に地山質多く混じる)
- 8 濁明黄褐色粘質土 (灰色粘土ブロック若干)
- 9 暗黄褐色粗砂 (地山か)



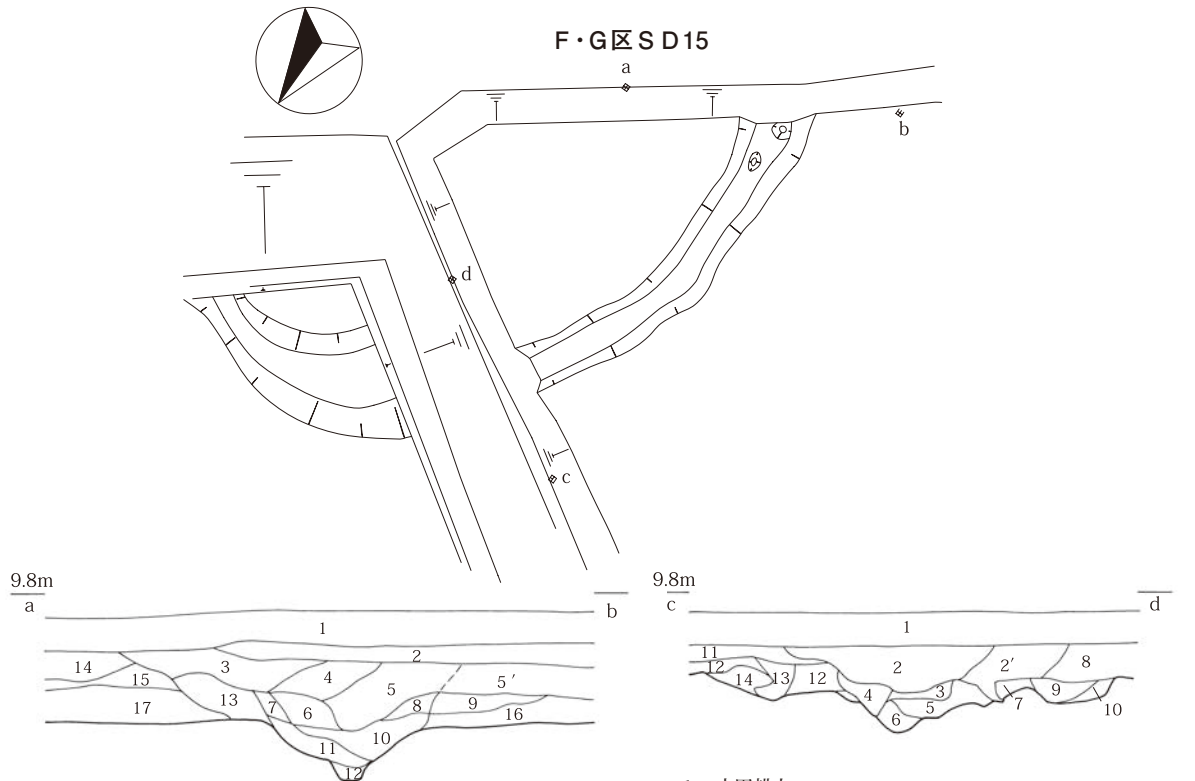
- 1 暗灰褐色砂質土 (地山粒・炭粒)
- 2 濁黄褐色シルト (地山のシルト主体)
- 3 淡暗灰褐色砂質土 (1より砂質)
- 4 濁暗灰褐色砂質土 (1に地山ブロックが多く混じる)
- 5 濃暗灰褐色粘質土 (最も暗い色調、粘性あり、地山ブロック少量)



- 1 濃灰褐色粘質土 (炭粒多量)
- 2 暗灰褐色粘質土 (炭粒少量)
- 3 暗青灰色粘質土 (1が還元か、炭粒多量)
- 4 暗青灰色粘砂 (色調3に近似、炭粒なし)
- 5 濁灰褐色粘砂 (灰褐色粘質土に地山のシルト)
- 6 濁青灰褐色粘砂 (5が還元か)
- 7 濁明黄褐色砂質土 (地山の砂質土主体、灰褐色粘質土多く混じる)
- 8 黄褐色砂質土 (地山に近似、灰褐色粘質土ブロック若干)

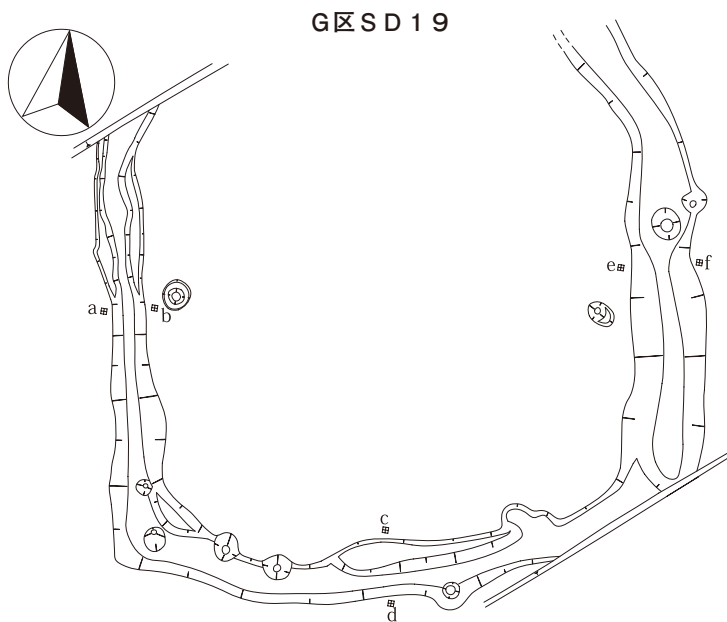
0 (1:40) 2m

第13図 平成21年度調査土坑遺構図 (S = 1/40)



- 1 水田耕土
- 2 水田床土
- 3 暗灰褐色粘質土
- 4 淡黒灰色粘質土
- 5 黒灰色粘質土 5' 5層よりやや淡い
- 6 濃暗灰褐色粘質土 (黄灰色シルトブロック)
- 7 濁暗黄灰色シルト
- 8 濁暗灰褐色シルト (地山のシルト多く混じる)
- 9 濁灰褐色粘質土
- 10 濁灰白色粘質土 (地山ブロック)
- 11 濁黄褐色シルト
- 12 濁灰褐色粘質土 (底の小ピットの覆土)
- 13 濁暗黄灰色シルト
- 14 灰褐色粘質土
- 15 濁暗黄灰色シルト
- 16 土色無し
- 17 淡黄褐色シルト

- 1 水田耕土
- 2 黒灰色粘質土 (2' はやや淡い色調)
- 3 淡黒灰色粘質土 (地山粒少量)
- 4 濁黒灰色粘質土 (地山ブロック)
- 5 灰褐色粘質土 (地山粒少量)
- 6 明黄灰色シルト (やや粘質)
- 7 濁明黄灰色シルト
- 8 濁灰褐色粘質土
- 9 濁淡灰褐色シルト (地山粒多量)
- 10 濁黄灰色シルト (地山ブロック多量)
- 11 濁淡黒灰色粘質土 (地山粒多量)
- 12 濁灰褐色粘質土
- 13 濁淡黒灰色粘質土 (12に近似)
- 14 淡黄灰色粘質土 (地山質主体)



9.6m
a b

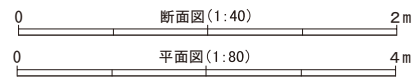
- 1 暗オリーブ灰色粘質土
- 2 オリーブ灰色粘砂

9.5m
c d

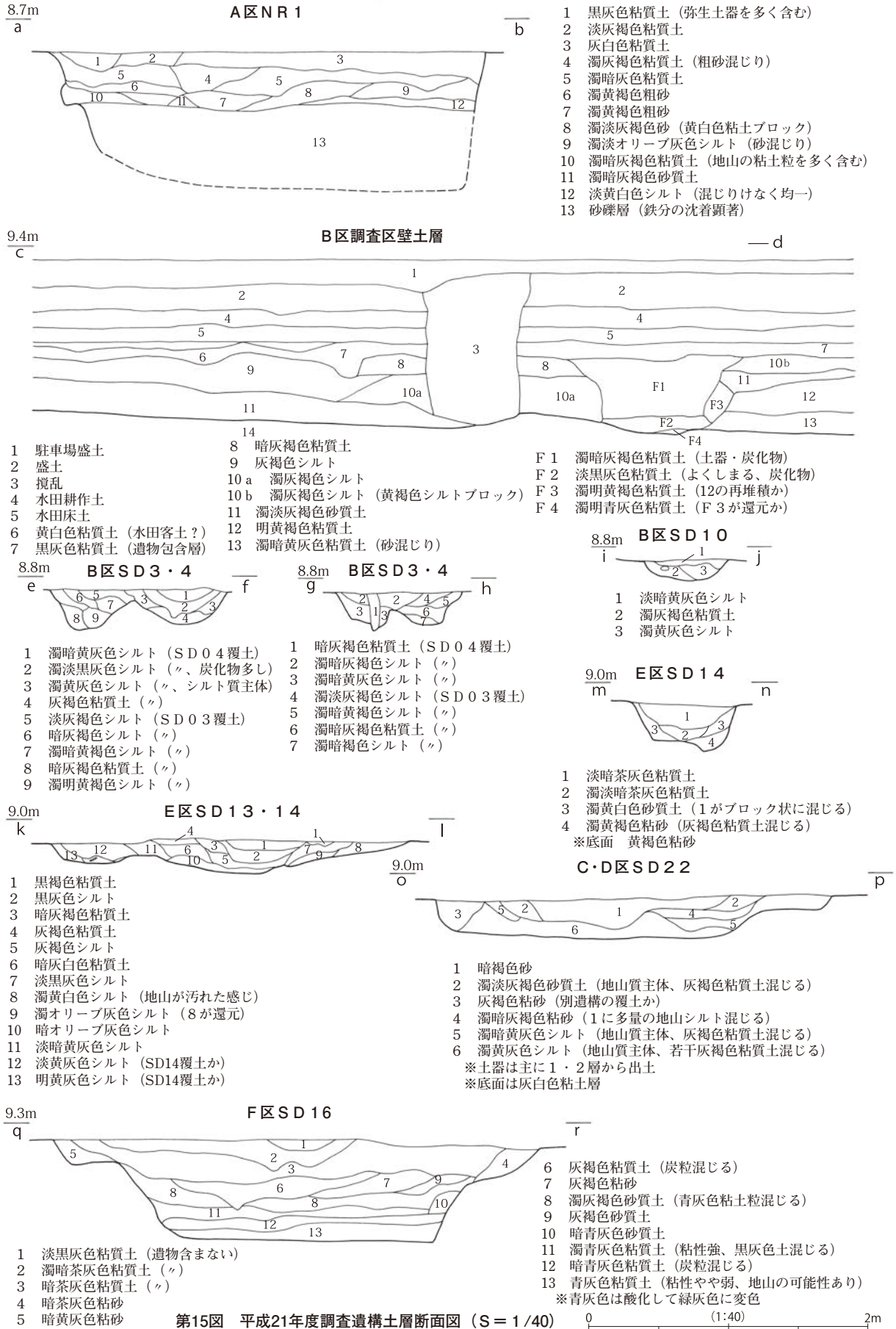
- 1 灰褐色粘砂
- 2 灰褐色粘質土
- 3 濁灰褐色粘質土 (地山質含む)
- 4 暗灰白色粘砂

9.6m
f e

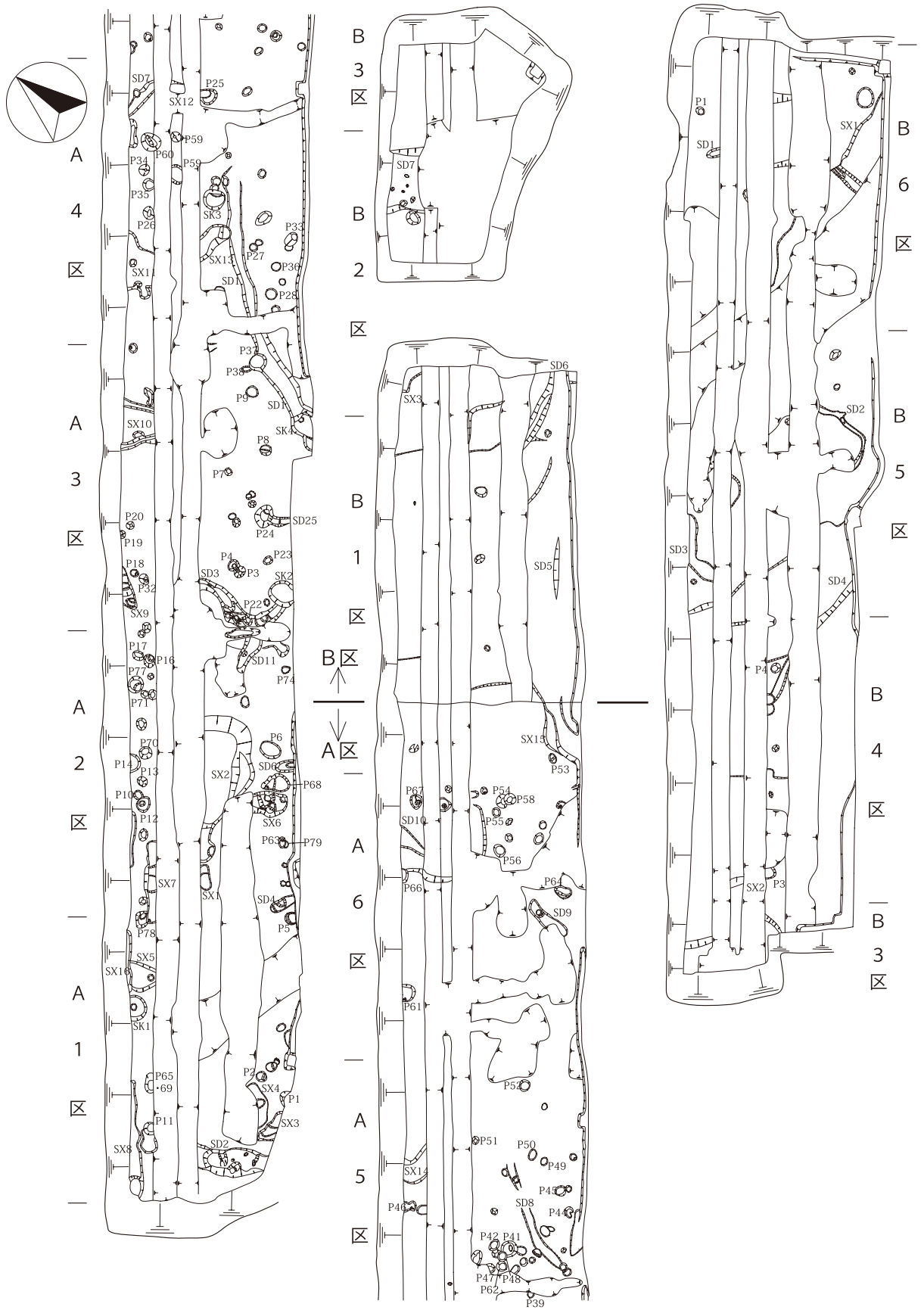
- 1 暗灰褐色粘質土
- 2 灰褐色粘質土 (地山の砂含む)
- 3 暗灰白色砂質土
- 4 暗灰白色粘砂



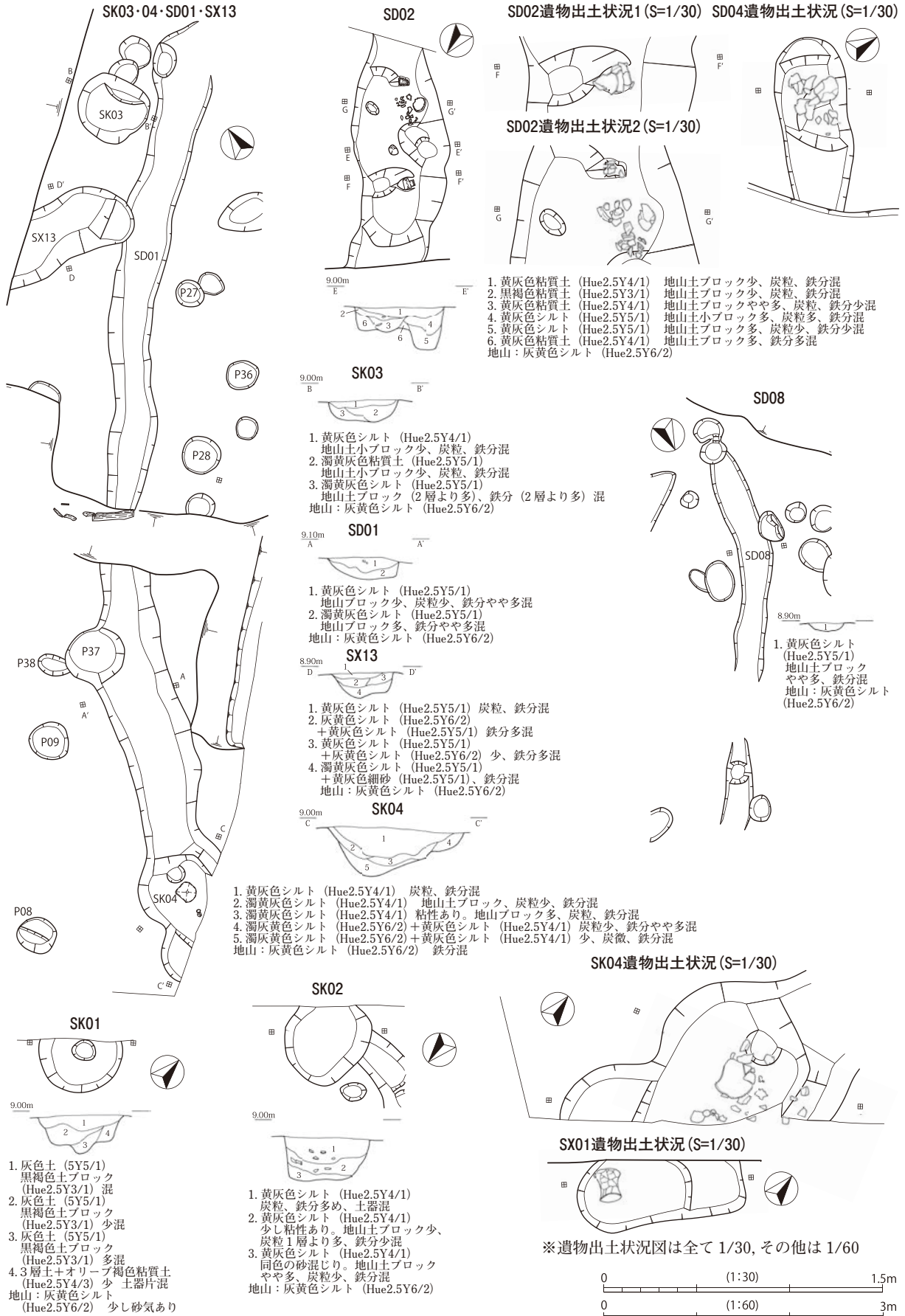
第14図 平成21年度調査溝遺構図 (平面図: S = 1/80、断面図: S = 1/40)



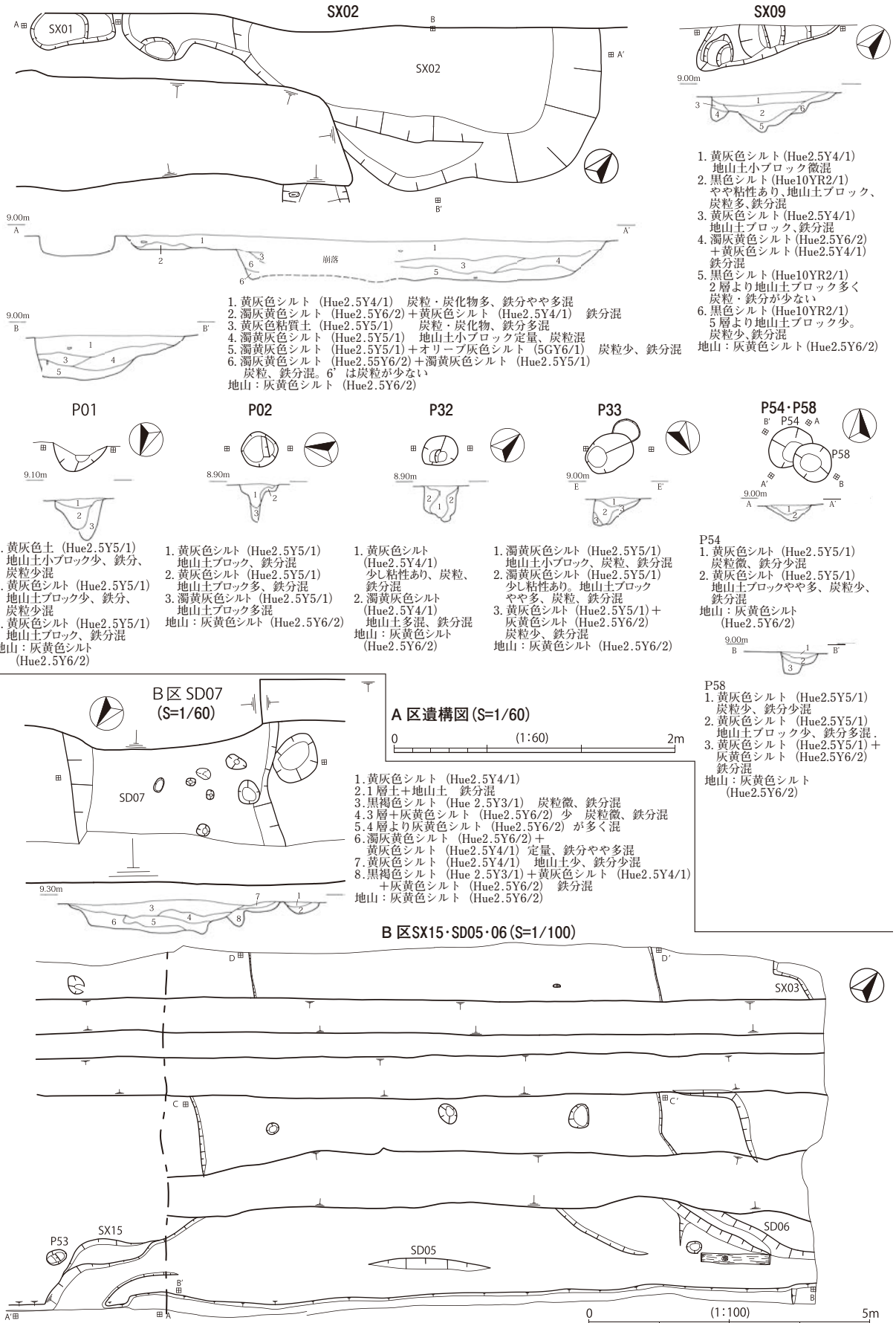
第15図 平成21年度調査遺構土層断面図 (S = 1/40)



第16図 平成22年度調査全体図 (S=1/200)



第17図 平成22年度調査A区遺構図 (S=1/30、1/60)



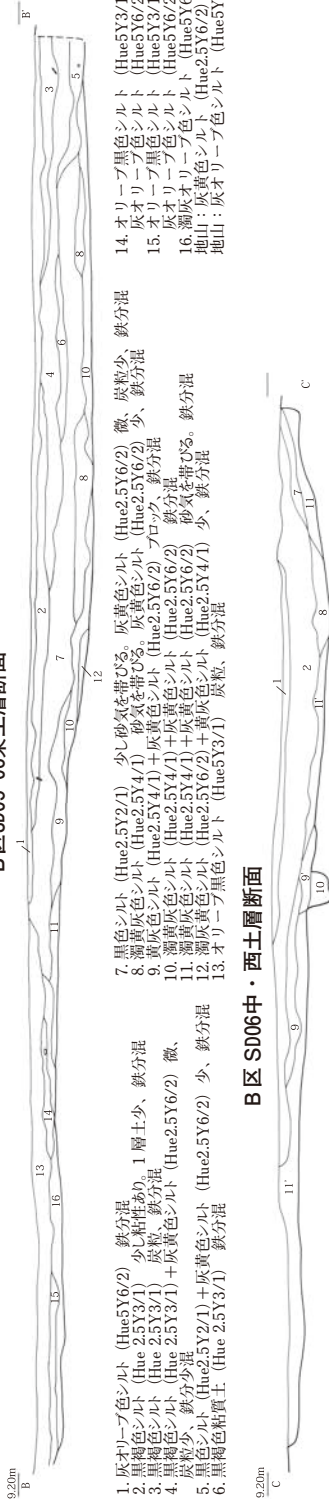
第18図 平成22年度調査 A・B区遺構図1 (S=1/60, 1/100)

A区SX15東壁土層断面



1. 盛土
2. 黒色シルト (Hue10YR2/1) 少し粘性あり。鉄分混
3. 黒褐色シルト (Hue2.5Y3/1) 地山土ブロック少量。鉄分や多混
4. 黒褐色シルト (Hue2.5Y3/1) + 黄灰色シルト (Hue2.5Y5/1)
5. 黒褐色シルト (Hue2.5Y6/2) + 黒褐色シルト (Hue2.5Y3/1)、鉄分混
6. 灰黄色シルト (Hue2.5Y6/2) 鉄分混…地山
7. 緑灰色シルト (Hue5GY6/1) 鉄分混…地山

B区SD05・06東土層断面

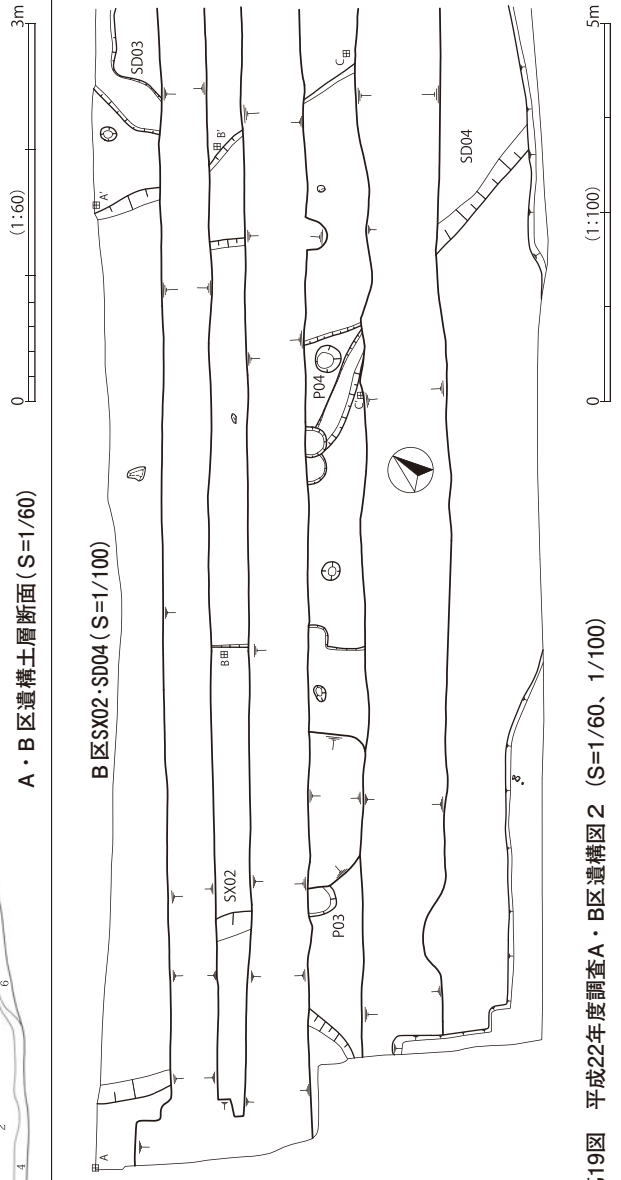


1. 灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) 鉄分混
2. 黒褐色シルト (Hue2.5Y3/1) 少し粘性あり。1層土少。鉄分混
3. 黒褐色シルト (Hue2.5Y3/1) 炭粒。鉄分混
4. 黒褐色シルト (Hue2.5Y3/1) + 灰黄色シルト (Hue2.5Y6/2) 微、鉄分混
5. 黒色シルト (Hue2.5Y2/1) + 灰黄色シルト (Hue2.5Y6/2) 少、鉄分混
6. 黒褐色粘質土 (Hue2.5Y3/1) 鉄分混
7. 黒色シルト (Hue2.5Y2/1) 少し粘性を帯びる。灰黄色シルト (Hue2.5Y6/2) 微、炭粒少。鉄分混
8. 黒黄灰色シルト (Hue2.5Y4/1) 砂気を帯びる。灰黄色シルト (Hue2.5Y6/2) 少、鉄分混
9. 黒黄灰色シルト (Hue2.5Y4/1) + 灰黄色シルト (Hue2.5Y6/2) ブロック、鉄分混
10. 黒黄灰色シルト (Hue2.5Y4/1) + 灰黄色シルト (Hue2.5Y6/2) 鉄分混
11. 黒黄灰色シルト (Hue2.5Y4/1) + 灰黄色シルト (Hue2.5Y6/2) 砂気を帯びる。鉄分混
12. 黒黄灰色シルト (Hue2.5Y6/2) + 黄灰色シルト (Hue2.5Y4/1) 少、鉄分混
13. オリーブ黒色シルト (Hue5Y3/1) 炭粒、鉄分混
14. オリーブ黒色シルト (Hue5Y3/1) + 灰オリーブ黒色シルト (Hue5Y6/2) 小ブロック、鉄分混
15. オリーブ黒色シルト (Hue5Y3/1) + 灰オリーブ黒色シルト (Hue5Y6/2) ブロック少量、鉄分混
16. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) + 灰色シルト (Hue5Y4/1)、鉄分混

B区SD06中・西土層断面



1. 灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) 2層土少。鉄分混
2. オリーブ黒色シルト (Hue5Y3/1) + 灰オリーブ色シルト (Hue5Y5/2) 少、炭粒少。鉄分混
3. オリーブ黒色シルト (Hue5Y3/1) + 炭粒微、鉄分混
4. オリーブ黒色シルト (Hue5Y3/1) 少、鉄分や多混
- 4-1. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y3/1) + 炭粒微、鉄分混
- 4-2. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y3/1) 少、鉄分や多混
- 4-3. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y3/1) 少、鉄分や多混
- 4-4. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y3/1) + 灰色シルト (Hue5Y5/1) 少、鉄分や多混
5. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) 粘性あり。オリーブ黒色シルト (Hue5Y3/1) 少量、炭粒微。鉄分混
6. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) 粘性あり。オリーブ黒色シルト (Hue5Y3/1) 少量、炭粒微。鉄分混
7. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) 2層土微、鉄分混
8. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) ブロック、鉄分混
9. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) 鉄分混
- 9-1. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) + 黒褐色シルト (Hue2.5Y5/2) 少量、多めに混
- 9-2. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) + 黒褐色シルト (Hue2.5Y5/2) 少量、多めに混
- 9-3. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) + 黒褐色シルト (Hue2.5Y5/2) 少量、多めに混
10. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) オリーブ黒色シルト (Hue5Y3/1) 微混
11. 濁灰オリーブ色シルト (Hue5Y6/2) 2層土微、鉄分混
- 11-1. 砂気を帯びる。11より2層土や多
- 11-2. 砂気を帯びる。11より2層土や多
- 地山：灰黄色シルト (Hue2.5Y6/2)



第19図 平成22年度調査A・B区遺構図2 (S=1/60、1/100)

第4章 遺物（平成21・22年度）

第1節 平成21年度出土遺物

1. B区の遺物（第21図1～第23図43、第24図63）

1～7はS K01出土品。壺・甕類では有段口縁に擬凹線を施したものが卓越する（1～4）。1・3の口縁端部は尖縁で、外側につまみ上げるようにつくられている。2・4は丸縁で、4では内面の段がみられない。5は直線的に開く高杯の杯部で丁寧なミガキが施される。6は同じく脚部である。7は結合器台で器受部に涙滴状の透かしがみられる。8・9はS K02出土品。前者は端部を折り返す脚裾部、後者は有孔の蓋天井部つまみである。10～12はS K04出土品。10は3と口縁形態に加え胴部形態（球胴）・外面調整（右下がりのハケ）においても共通する。11は無文の有段口縁の鉢、12は通気孔を穿たれた底部で蒸し器的な機能が想定できる。

13・14はS K05出土品。ともに壺で、前者は内外赤彩の小型品、後者はハケが施された頸部である。15・16・18はS K06出土品。15・16は短い有段口縁の甕で前者にはやや波打つ擬凹線が施され、肩部には刺突がめぐらされている。18は内外に赤彩を施された有段口縁の鉢であり、17は高杯脚部である。19～21はS K11出土品。19は内外赤彩で丁寧にミガキを施す頸部が長くのびる壺、20・21は短い有段口縁の甕で後者に擬凹線・刺突が伴う。22・23はS X01出土品、24～27はピット（小穴）出土品。24は蓋、25～27は尖縁の有段口縁で、27では頸部のしまりが弱い。

29～38は溝出土品。28～32がS D03・04（S H01・02関連）、33・34がS D07から、また35・36がS D08、残る37・38がS D10（S B01関連）から出土している。28は段が退化した有段鉢形高杯、30も同様の鉢、32は口縁が内湾する鉢である。29が蓋のつまみ部、31・33・34は有段口縁の甕で31では頸部のくびれ、34では口縁内面の段に弛緩が認められる。36は有文の高杯脚裾上部、37・38は擬凹線を施す有段口縁の甕で、37の肩部には刺突がめぐる。39・40は遺構検出時の取上げ品、41・43は調査区壁面からの、42は試掘時の出土品である。石器ではS D03出土の敲石がある（第24図63）。

2. C・D区の遺物（第23図44～第24図57、64）

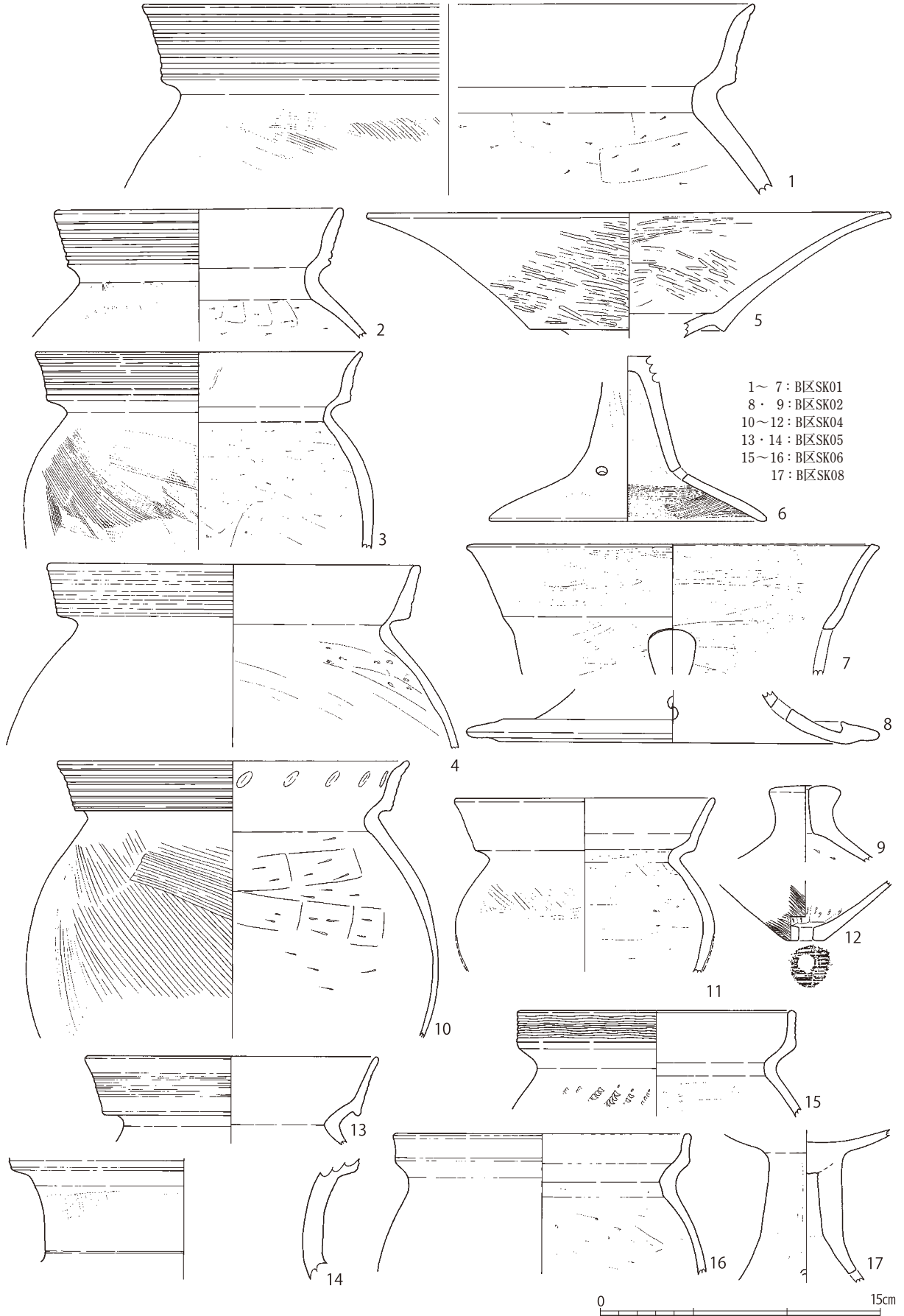
44～46はS K13出土品。有段口縁風の壺44では口縁外面に擬凹線が施され、それ以下ではハケ調整となる。45・46は蓋で、前者では外面のミガキ・赤彩が明瞭だが、後者のそれは状態が悪くはっきりとは確認できない。47（S K15出土）も蓋で外面にハケ調整が残る。48～52はS K20出土品。48は偏球形の胴部外面をミガキ・赤彩で仕上げた台付き壺、49・52は尖縁の有段口縁の甕で口縁外面に擬凹線、胴外面にハケ、胴内面にケズリを施す。50は脚台部、尖底で砲弾形を呈する51は手づくねのミニチュア土器である。53（S D17）、54（S D20）、55・56（S D22）は溝出土品。54は内外面に赤彩が施された可能性があり、他はいずれも擬凹線を伴う有段口縁の甕である。また小穴（P79）からは球胴にごく短い口縁部と低い脚台が付く57が出土している。その他、石器ではS K15出土の磨石（第24図64）がある。

3. F区の遺物（第24図58～62）

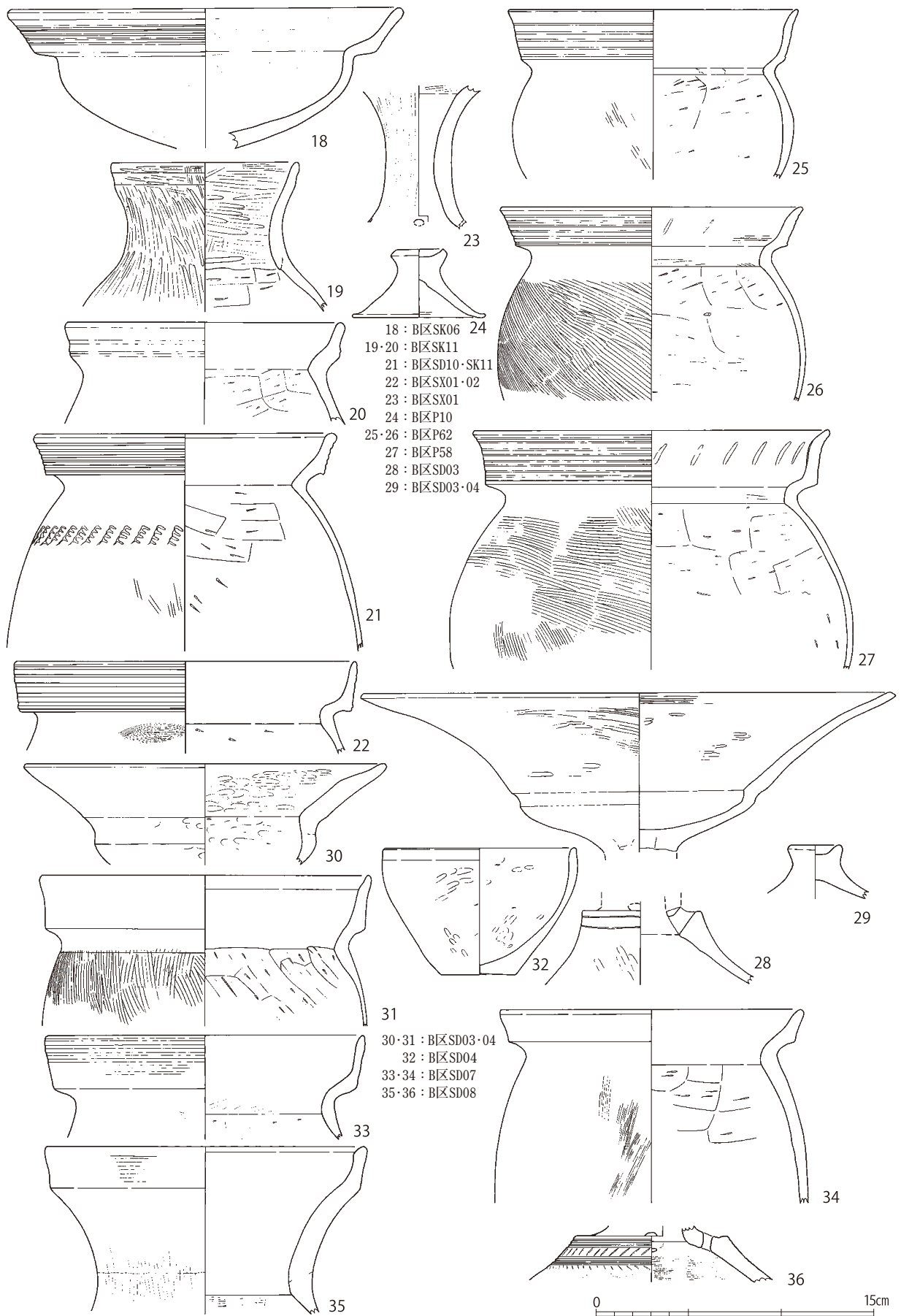
大溝SD16下層出土の鉢60は遺構の年代を示す資料であろう。上層からは須恵器杯蓋61が出土している。SD15出土の62は口縁端及び蓋受部の稜はシャープで底部の大半にロクロケズリが施される。SX03からは弥生土器（58・59）が出土している。前者は受口状口縁、後者は分厚い平底である。

第2節 平成22年度出土遺物（第24～26図）

65～67はA区SK02出土。66は有段口縁の甕で口縁外面に7条の擬凹線が巡る。67は有段口縁の鉢。68・69はA区SK04出土。68は蓋であり、ハの字に広がる体部に柱状の鈕がつき、鈕頂部は凹んでいる。69は無文の有段口縁を持つ鉢である。70はP17出土で、浅い体部を持つ鉢。71・72はP24出土で、71は壺であり、短く外反する口縁を持つ。72は器台脚部であり、脚柱部から脚裾部にかけて緩やかに開き、透し孔は4箇所。73・74はP35出土。73は途中で屈曲して広がる坏部に緩やかに広がる脚部を持つ高坏。74は有段口縁の壺。75はP64出土の有段口縁の甕で、口縁外面に5条の擬凹線が巡る。76はP86出土の甕で、短い口縁がほぼ直立する。77～79はA区SK01出土。77は小型土器であり、口縁が小さく外反し、平底の鉢形である。78は高坏であり、緩やかに開く脚部は透し孔を持ち赤彩されている。79は「く」の字に開く口縁端部を面取りしている甕。80～82はA区SD02から出土した有段口縁の甕で口縁外面に擬凹線が施されている。また、80・82の肩部にはハケ状工具による刻みが施されている。83～85はSD04出土。83・85は有段口縁の甕で口縁外面に擬凹線が施されている。84は口縁の断面が三角形で擬凹線が施されている甕。86は有段口縁を持つ甕で口縁外面に5条以上の擬凹線が巡る。87は棒状の高坏の脚柱部。88・89はA区SX01出土。88は口縁部がほぼ直立する甕で口縁外面に7条の擬凹線が巡る。89は脚付の壺だが、脚部は出土しなかった。90～95はA区SX02出土。90はハの字に開く体部に柱状の中空の鈕がつく蓋。91は高坏の坏部で、口縁が外反し体部が浅い。92は小型甕であり、有段口縁を持つ。93・94は有段口縁を持ち口縁外面に擬凹線が巡る甕。95は短い口縁が緩く外反する壺。96は有段口縁の甕で口縁外面に6条の擬凹線が巡る。97はSX03出土の甕であり、口縁が緩く屈曲して有段口縁状になっている。98はSX07出土の有段口縁の甕。99はSX08出土の脚柱部から脚裾部にかけて緩やかに開く高坏脚部であり、外面赤彩され、透し孔は3箇所以上。100は蓋であり、ハの字に開く体部に頂部が大きく凹み左右に張り出す鈕がつき、外面は赤彩されている。101は台付鉢で半球状の体部に小さな脚がつく。102は深い坏部に緩やかに広がる脚部を持つ高坏。104は高坏の脚部。脚柱部から脚裾部にかけて緩やかに開く。105は棒状の脚柱部。106～108は有段口縁を持つ甕。107・108の口縁外面に擬凹線が巡る。また、108の口縁内面には指頭圧痕が残る。



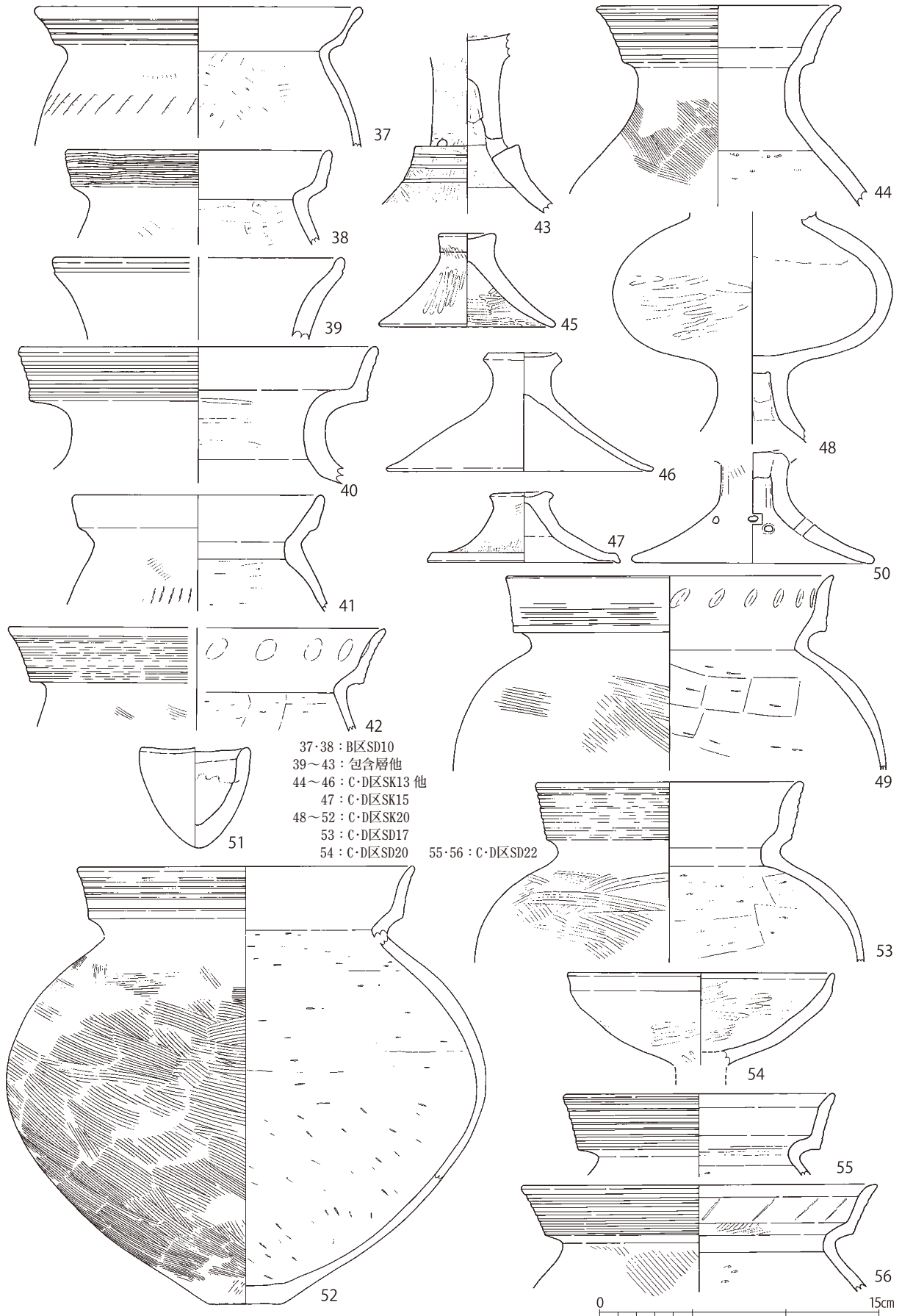
第21図 平成21年度調査土器実測図1 (S=1/3)



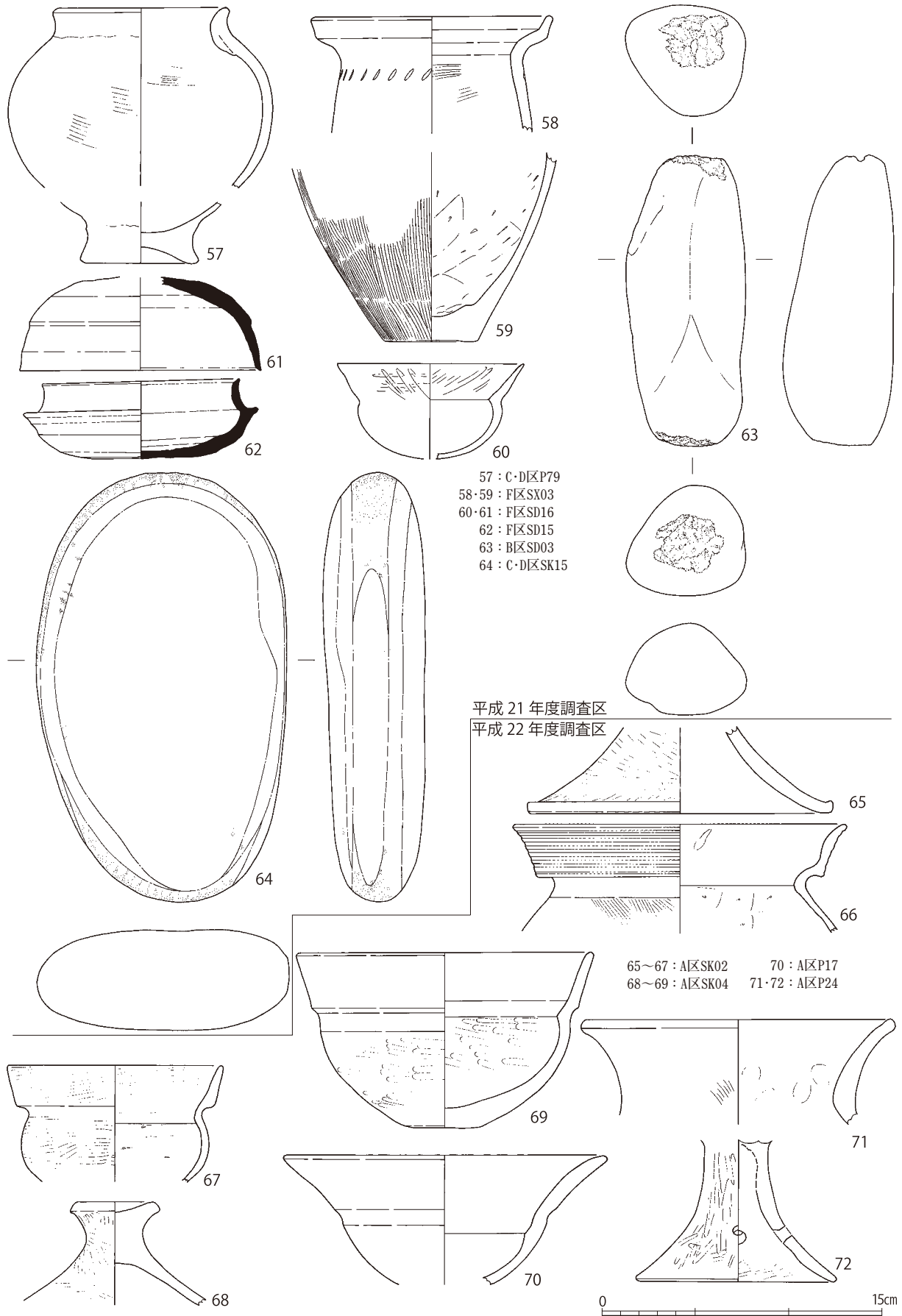
- 18 : B区SK06 24
- 19-20 : B区SK11
- 21 : B区SD10-SK11
- 22 : B区SX01-02
- 23 : B区SX01
- 24 : B区P10
- 25-26 : B区P62
- 27 : B区P58
- 28 : B区SD03
- 29 : B区SD03-04

- 30-31 : B区SD03-04
- 32 : B区SD04
- 33-34 : B区SD07
- 35-36 : B区SD08

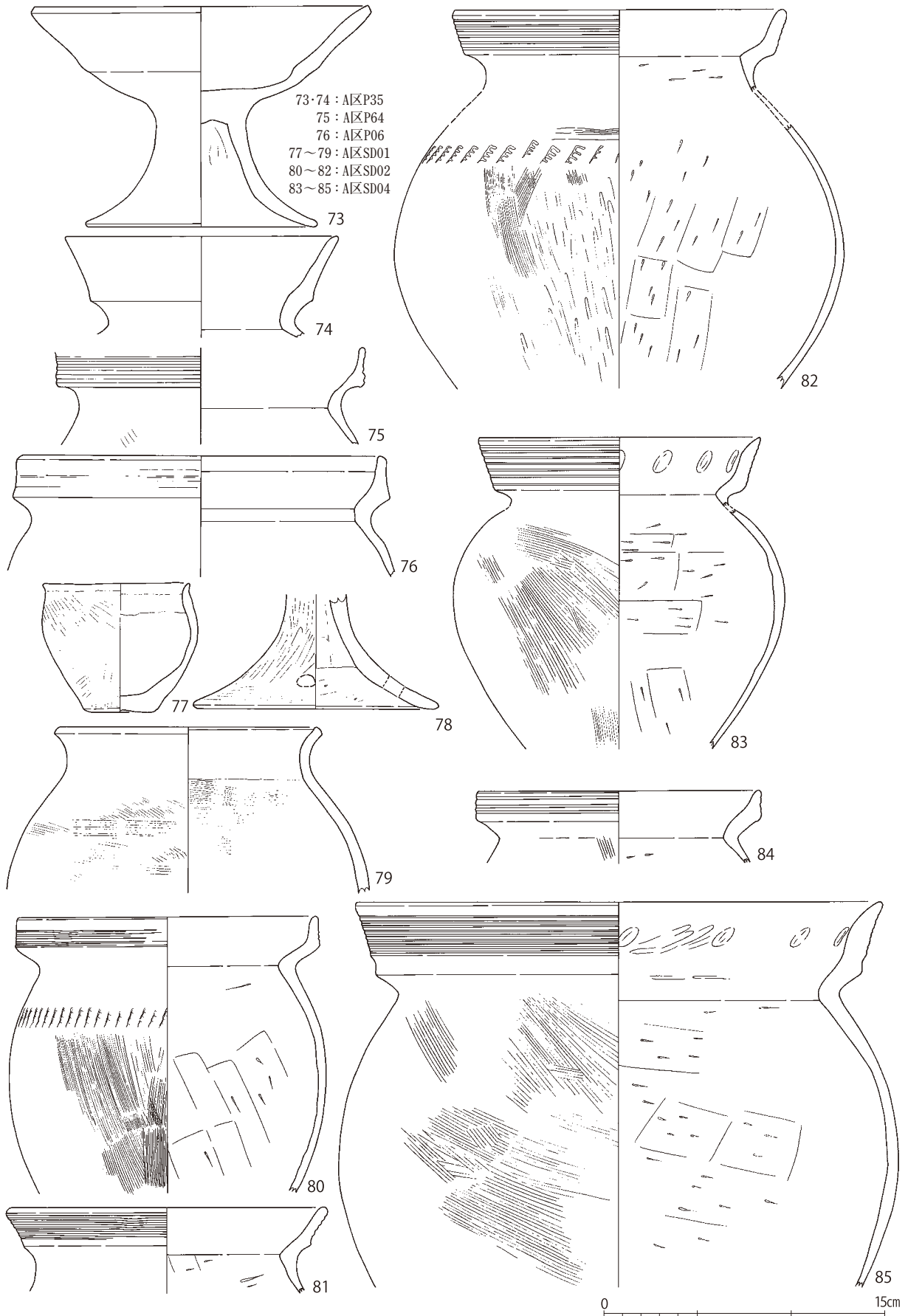
第22図 平成21年度調査土器実測図2 (S = 1 / 3)



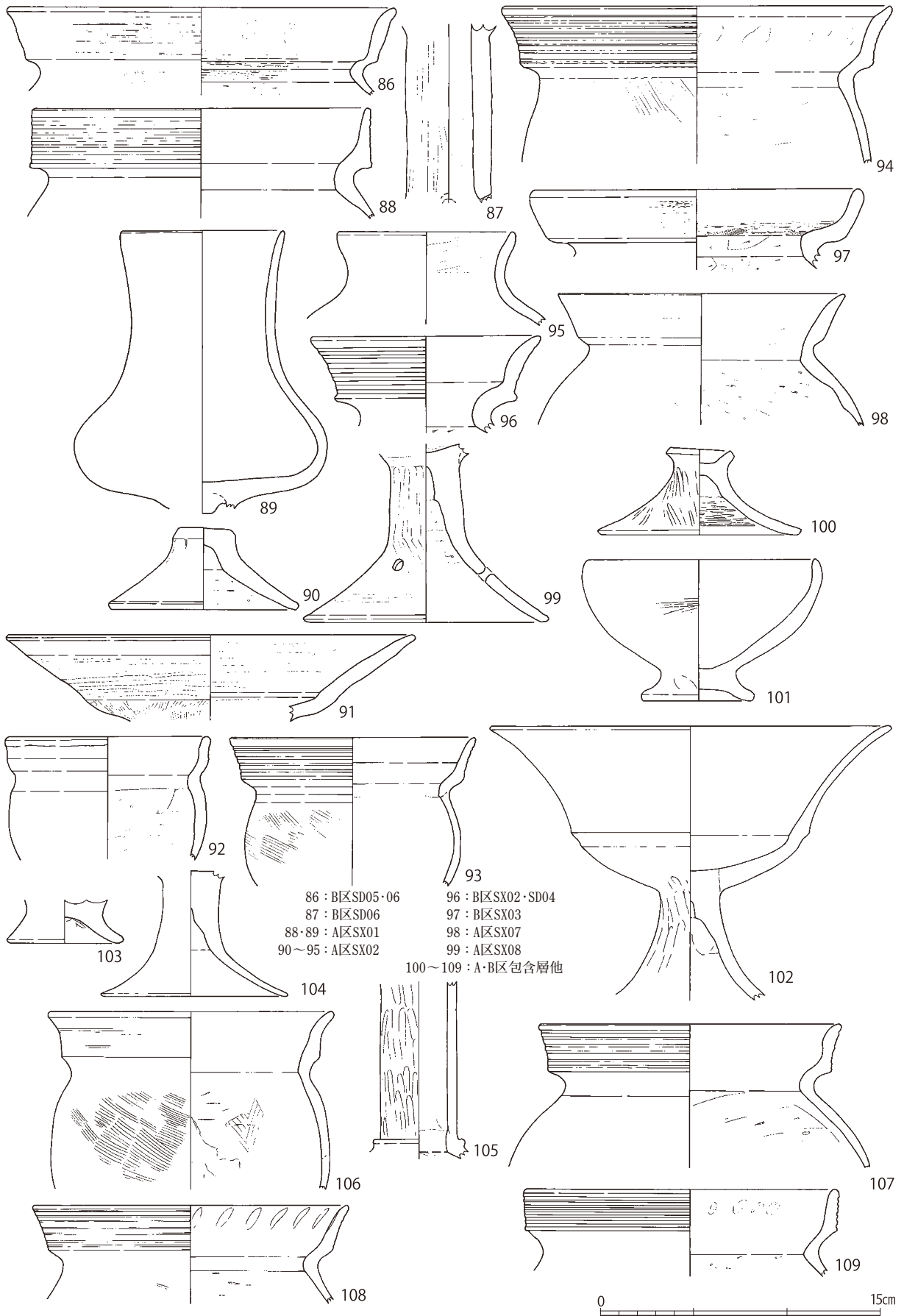
第23図 平成21年度調査土器実測図3 (S=1/3)



第24図 平成21・22年度調査遺物実測図 (S = 1 / 3)



第25図 平成22年度調査土器実測図1 (S=1/3)



第26図 平成22年度調査土器実測図2 (S = 1 / 3)

第2表 平成21年度調査区遺物観察表

挿図番号	実測番号	出土地点	種別	器種	計測値 (cm)	備考 (数値はcm)		
第21図	1	C69	B区SK01	弥生土器	甕	口径33.0前後	大型甕、有段口縁（擬凹線・尖縁）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
	2	C68	B区SK01	弥生土器	甕	口径15.6	有段口縁（擬凹線・丸縁）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
	3	C49	B区SK01	弥生土器	甕	口径17.6	有段口縁（擬凹線・尖縁、内面圧痕）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
	4	C48	B区SK01	弥生土器	甕	口径20.0前後	有段口縁（擬凹線・丸縁・スス付着）、胴内面ケズリ	
	5	C72	B区SK01	弥生土器	高杯	口径18.2	内外ミガキ	
	6	C67	B区SK01	弥生土器	高杯	底径15.0	3孔、脚裾内ハケ	
	7	C70	B区SK01	弥生土器	器台	口径22.2	結合器台、内外ミガキ、涙滴状透かし孔	
	8	C46	B区SK02	弥生土器	高杯	底径20.2	内外ナデ、脚端折返し状	
	9	C71	B区SK02	弥生土器	蓋?	上端径3.8	有孔、内ケズリ	
	10	C75	B区SK04 他	弥生土器	甕	口径18.9	有段口縁（擬凹線・尖縁、内面圧痕）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
	11	C73	B区SK04	弥生土器	甕	口径13.9	有段口縁、胴外ハケ・胴内ケズリ、外スス付着	
	12	C74	B区SK04	弥生土器	甕	底径2.0	底部穿孔、胴外ハケ・胴内ケズリ、	
	13	C77	B区SK05	弥生土器	壺	口径15.8	二重口縁（擬凹線）、外面赤彩	
	14	C76	B区SK05	弥生土器	壺		外ハケ、沈線1条	
	15	C78	B区SK06	弥生土器	甕	口径15.0	有段口縁（擬凹線・丸縁）、胴外刺突・胴内ケズリ	
	16	C79	B区SK06	弥生土器	甕	口径15.6	有段口縁（ヨコナデ）、胴内ケズリ	
	17	C81	B区SK08	弥生土器	高杯		外面ハケ	
第22図	18	C80	B区SK06	弥生土器	鉢	口径21.5	有段鉢（擬凹線）、赤彩、内面・体外ミガキ	
	19	C83	B区SK11	弥生土器	壺	口径10.2	赤彩、外面・口内ミガキ、胴内ケズリ	
	20	C82	B区SK11	弥生土器	甕	口径15.5	有段口縁（ヨコナデ）、胴内ケズリ	
	21	C84	B区SD10・SK11	弥生土器	甕	口径16.4	有段口縁（擬凹線・丸縁）、胴外刺突・胴内ケズリ	
	22	C100	B区SX01・02	弥生土器	甕	口径18.6	有段口縁（擬凹線・丸縁）、胴外ハケ・胴内ケズリ、外面スス	
	23	C101	B区SX01	弥生土器	器台		4孔、脚外ミガキ	
	24	C85	B区P10	弥生土器	蓋	口径7.2、器高3.3	ミガキ、上端径3.0	
	25	C87	B区P62	弥生土器	甕	口径15.6	有段口縁（擬凹線・尖縁）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
	26	C88	B区P62	弥生土器	甕	口径16.2	有段口縁（擬凹線・尖縁、内面圧痕）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
	27	C86	B区P58	弥生土器	甕	口径19.4	有段口縁（擬凹線・尖縁、内面圧痕）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
	28	C89	B区SD03	弥生土器	高杯	口径29.0	杯内外ミガキ、脚裾部有段・沈線2条	
	29	C91	B区SD03・04	弥生土器	蓋	上端径2.9	表面摩耗	
	30	C92	B区SD03・04	弥生土器	高杯?	口径19.6	外ミガキ?、内ミガキ	
	31	C90	B区SD03・04	弥生土器	甕	口径18.0	有段口縁（ヨコナデ・尖縁）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
	32	C93	B区SD04	弥生土器	鉢	口径10.5、器高6.9	内外ミガキ、口唇ヨコナデ、底径4.0	
	33	C94	B区SD07	弥生土器	甕	口径17.3	有段口縁（擬凹線）、頸内ハケ・胴内ケズリ	
	34	C104	B区SD07 他	弥生土器	甕	口径16.5	有段口縁（ヨコナデ・丸縁）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
	35	C105	B区SD08	弥生土器	壺	口径17.5	口内外ヨコナデ、頸外ハケ、胴内ケズリ	
	36	C95	B区SD08	弥生土器	高杯?		脚裾有段、外ミガキ・内ハケ、沈線・キザミ	
	第23図	37	C102	B区SD10	弥生土器	甕	口径17.7	有段口縁（擬凹線・丸縁）、胴外刺突・胴内ケズリ
		38	C103	B区SD10	弥生土器	甕	口径14.5	有段口縁（擬凹線・丸縁）、胴外ハケ・胴内ケズリ
		39	C47	B区包含層	弥生土器	壺	口径推定15.8	内外ナデ、凹線1条
40		C97	B区包含層	弥生土器	壺	口径19.4	有段口縁（擬凹線）、内外ナデ	
41		C99	B区壁	弥生土器	甕	口径13.6	口内外ヨコナデ、胴外刺突、胴内ケズリ	
42		C96	B区（試掘）	弥生土器	甕	口径20.2	有段口縁（擬凹線・尖縁、内面圧痕）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
43		C98	B区壁	弥生土器	高杯		外面ミガキ、3孔、沈線3条	
44		C53	C・D区SK13 他	弥生土器	壺	口径13.1	有段口縁（擬凹線）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
45		C54	C・D区SK13 他	弥生土器	蓋	口径9.5、器高5.0	内外ミガキ、外面赤彩、上端径3.1	
46		C55	C・D区SK13・20	弥生土器	蓋	口径14.4、器高6.4	内外ナデ、上端径4.2	
47		C58	C・D区SK15	弥生土器	蓋	口径10.4、器高3.8	外ハケ+ナデ、内ナデ、上端径3.4	
48		C61	C・D区SK20	弥生土器	壺	口径15.0	台付き、外面ミガキ・赤彩	
49		C56	C・D区SK20	弥生土器	甕	口径17.6	有段口縁（擬凹線・尖縁）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
50		C59	C・D区SK20	弥生土器	高杯	底径13.0	表面摩耗、4孔	
51		C60	C・D区SK20	弥生土器	小型	口径6.0、器高5.4	内外ナデ?、粘土紐痕	
52		C57	C・D区SK20	弥生土器	壺	口径18.2、底径4.0	有段口縁（擬凹線）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
53		C64	C・D区SD17	弥生土器	壺	口径14.5	有段口縁（擬凹線）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
54		C62	C・D区SD20	弥生土器	高杯	口径14.4	内面ミガキ	
55		C51	C・D区SD22	弥生土器	甕?	口径14.6	有段口縁（擬凹線・尖縁）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
56		C50	C・D区SD22	弥生土器	甕	口径19.2	有段口縁（擬凹線・尖縁、内面圧痕）、胴外ハケ・胴内ケズリ	
第24図	57	C63	C・D区P79	弥生土器	壺	口径9.4、底径6.3	台付き無頸壺、表面摩耗	
	58	C52	F区SX03	弥生土器	甕	口径13.0	受口状口縁（内外ナデ）、胴外キザミ、胴内ハケ+ナデ	
	59	C65	F区SX03	弥生土器	甕	底径5.1	外ハケ、内ケズリ	
	60	C66	F区SD16	土師器	鉢	口径10.0、器高5.1	小型丸底鉢、口内外ミガキ、体内内外ナデ	
	61	D 2	F区SD16	須恵器	杯蓋	口径13.0、器高5.0前後	天井降灰・周縁ロクロケズリ、端部に外傾面	
	62	D 1	F区SD15	須恵器	杯身	口径10.6、器高4.3	底部を広範囲にロクロケズリ	
	63	石 1	B区SD03	敲石	凝灰岩	長15.7、幅6.4、厚6.0	両端部に敲打痕、重さ761g	
	64	石 2	C・D区SK15	磨石	砂岩	長23.1、幅13.6、厚5.5	表裏両面及び面取りされた一側面に磨痕、重さ2.26Kg	

第3表 平成22年度調査区土器観察表

報告 番号	実測 番号	出土地点		器種	法量(cm)			残存率	色調		胎土	焼 成	調整		備考
		グリッド	遺構		口径	底径	器高		内面	外面			内面	外面	
65	C4	A3	SK02	高坏		16.4	(4.2)	底8/12	にぶい橙	にぶい橙	細砂・粗砂・礫並、 焼土塊、黒雲母	良	回転ナデ	ミガキ、回転ナデ	
66	C45	A3	SK02	甕	(17.7)		(5.9)	口径1/12	にぶい橙	にぶい黄橙	細砂・粗砂並、 礫少、焼土塊	良	ヨコナデ、指頭 圧痕、ケズリ	7条の擬凹線、 ヨコナデ、ハケ	外面煤付着
67	C3	A3	SK02	小型壺	11.6		(6.2)	口径5/12	にぶい橙	にぶい橙	細砂・粗砂・礫少、 焼土塊	良	ハケ、ケズリ	ハケ	
68	C5	A3	SK04	蓋		つまみ 径4.8	(5.6)	つまみ 12/12	にぶい橙	にぶい橙	細砂並、粗砂・礫少、 焼土塊、石英	良	ナデ	ナデ、ミガキ	
69	C2	A3	SD1内SK4 SD1	鉢	16.0	4.2	9.45	口径3/12 底12/12	橙	淡赤橙、 灰白	細砂並、赤色粒、 焼土塊、石英	良	ミガキ	ミガキ	外面煤付着
70	C44	A2	P17	鉢	(17.3)		(6.9)	口径2/12	浅黄橙	浅黄橙	粗砂多・礫少、焼土塊	良	摩耗のため不明	摩耗のため不明	
71	C31	A4	P24	壺	16.8		(5.6)	口径5/12	浅黄橙	浅黄橙	粗砂多、焼土塊	良	ヨコナデ、指頭圧痕	ヨコナデ、ハケ	外面一部黒斑
72	C32	A4	P24	器台		(7.55)	(10.7)	底2/12	褐灰	灰黄褐	粗砂多、礫少、焼土塊、 海綿骨針、扉石?あり	良	ナデ、ハケ	ハケのちミガキ	孔4つ
73	C34	A4	P35	高坏	18.1	12.35	11.8	口径3/12	淡赤橙	浅黄橙	粗砂多、焼土塊	良	絞り目、摩耗のため不明	摩耗のため不明	
74	C35	A4	P35	壺	14.6		(5.4)	口径3/12	橙	にぶい橙	粗砂多、礫少、焼土塊、 雲母	良	ケズリ、摩耗の ため不明	摩耗のため不明	
75	C30	A6	P64	甕	(16.6)		(5.1)	口径2/12	浅黄橙	橙	粗砂多、礫少、焼土塊、 海綿骨針	良	ヨコナデ	5条の擬凹線、 ヨコナデ、ハケ	
76	C7	A2	P06	甕	19.8		(6.5)	口径3/12	浅黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、礫少、赤色粒	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	外面煤付着
77	C1	A3	SD01	小型土器	7.8	4.0	6.95	口径8/12 底12/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂・粗砂・礫並、 海綿骨針少、焼土塊	良	ナデ	ハケ	
78	C28	A3	SD01 包含層	高坏		13.1	(6.1)	底3/12	にぶい黄橙	にぶい橙	細砂・粗砂・礫並、 焼土塊	良	ナデ、ケズリ	ミガキ	外面赤彩か? 孔の数不明
79	C33	A3	SD01 包含層	甕	14.1		(8.9)	口径7/12	にぶい黄橙	にぶい橙	細砂少、粗砂・礫並、 焼土塊、海綿骨針	良	ヨコナデ、ハケ、 ナデ?	ヨコナデ、ハケ	
80	C21	A1	SD02	甕	16.2		(14.8)	口径3/12	黄灰	にぶい黄橙	粗砂・礫多、焼土塊多	良	ナデ、ケズリ	4条の擬凹線、 刻み、ナデ、ハケ	
81	C23	A1	SD02	甕	17.2		(4.6)	口径縁完形	黄灰	黄灰	粗砂多・礫微	良	ナデ、ケズリ	5~6条の擬凹線、ナデ	
82	C22	A1	SD02	甕	18.0		(20.4)	口径5/12	灰黄褐	にぶい黄橙、 褐灰	粗砂・礫多	良	ナデ、ケズリ	6条の擬凹線、刻み、 ナデ、ハケのちミガキ	
83	C16	A1	SD04	甕	15.1		(16.8)	口径4/12	にぶい橙	にぶい橙	粗砂・礫多、 焼土塊少	良	指頭圧痕、ケズリ	7条の擬凹線、 ナデ、ハケ	外面一部煤付着
84	C37	A1	SD04	甕	(15.2)		(3.85)	口径2/12	浅黄橙	黒褐、 浅黄橙	粗砂・礫多、 焼土塊	良	ナデ、ケズリ	3条の擬凹線、 ナデ、ハケ	外面煤付着
85	C15	A1	SD04	甕	28.3		(20.7)	口径5/12	橙	橙、黄灰	粗砂多、礫並、 焼土塊多	良	指頭圧痕、ミガキ、 ナデ、ケズリ	9条の擬凹線、 ハケ	
86	C27	B1~2	SD5・6 合流部	甕	(20.8)		(4.7)	口径1/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、礫少、 赤色粒	良	ハケのちヨコナデ、ハ ケ、ケズリ、指頭圧痕	ヨコナデ、5条以 上の擬凹線、ハケ	外面煤付着
87	C26	B1~2	SD06	高坏脚部			(9.6)	脚部12/12	浅黄橙	浅黄橙	粗砂並、礫少、焼土塊	良	絞り目	ミガキ	孔の数不明
88	C11	A2	SX01	甕	18.2		(5.9)	口径3/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂・粗砂多、 焼土塊	良	摩耗のため不明	7条の擬凹線、ヨコナ デ、摩耗のため不明	
89	C8	A2	SX01	壺	8.8		(15.3)	口径11/12	にぶい橙	にぶい橙	細砂・粗砂少、 焼土塊少	良	摩耗のため不明	摩耗のため不明	脚がつくが見つ からなかった
90	C42	A2	SX02	蓋	(10.2)	つまみ 径2.8	4.4	つまみ 2/12、 口径1/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂・粗砂多、 焼土塊	良	ナデ、ケズリ	ナデ、ヨコナデ のちミガキ	つまみ頂部の一部 に粘土が寄せられて いる
91	C40	A2	SX02	高坏	(22.0)		(4.6)	口径2/12	にぶい橙	にぶい橙	細砂・粗砂並	良	ミガキ	ヨコナデ、ミガキ、ハケ	
92	C41	A2	SX02	小型甕	(11.0)		(6.6)	口径2/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂・粗砂並、 焼土塊	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、摩耗 のため不明	
93	C10	A2	SX02	甕	13.2		(8.0)	口径5/12	にぶい橙	にぶい橙	細砂・粗砂多、 焼土塊	良	摩耗のため不明	6条の擬凹線、 ヨコナデ、ハケ	外面煤付着
94	C9	A2	SX02	甕	(21.0)		(8.5)	口径2/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂・粗砂多、 焼土塊	良	ヨコナデ、指頭 圧痕、ケズリ	8条の擬凹線、 ヨコナデ、ハケ	
95	C43	A2	SX02	壺	9.6		(5.0)	口径3/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂・粗砂並、礫少	良	ハケ、摩耗のため不明	ヨコナデ	
96	C24	B4~5	SX02~SD04	壺	(12.4)		(5.2)	口径2/12	浅黄	にぶい黄橙	粗砂並、礫少、 焼土塊	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ケズリ	6条の擬凹線、 ヨコナデ
97	C25	B2	SX03	甕	17.4		(4.3)	口径3/12	浅黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、礫少、 焼土塊	良	ヨコナデ、ハケ、 ケズリ	ヨコナデ	外面煤付着
98	C39	A1~2	SX07	甕	15.4		(7.1)	口径3/12	にぶい橙	にぶい橙	細砂・粗砂多、礫少、 焼土塊少、海綿骨針	良	ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ、 擬凹線か?	
99	C14	A1	SX08	高坏		13.2	(9.6)	底6/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙、 にぶい橙	細砂・粗砂多	良	ヨコナデ、ケズ リ、ミガキ	ハケのちミガキ	外面赤彩、 孔3つ以上
100	C12	A1	包含層	蓋	10.5	つまみ 径3.7	4.7	完形	にぶい黄橙	にぶい橙	粗砂並、礫少、 焼土塊、黒雲母	良	ヨコナデ、ヘラ ミガキ、ナデ	ヘラミガキ	外面赤彩
101	C13	A1	包含層	台付鉢	(12.2)	6.0	7.6	口径小片 脚部完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、礫並	良	ナデ?摩耗のた め不明	ハケ、指頭圧痕、 摩耗のため不明	全体に煤付着
102	C17	A1	包含層	高坏	21.6		(13.8)	口径3/12	にぶい橙	赤彩橙	粗砂並、礫僅か	良	摩耗のため不明、指 頭によるおさえ	摩耗のため不明、 ハケ	外面赤彩
103	C38	A1	遺構検出	脚部		6.25	(2.35)	底9/12	橙	橙	粗砂多、焼土塊	良	摩耗のため不明	摩耗のため不明	
104	C18	A1	包含層	高坏		裾部径 10.0	(6.7)	裾部6/12	にぶい橙	にぶい橙	粗砂並、焼土塊多	良	摩耗のため不明	摩耗のため不明	
105	C6	A2	包含層	高坏			(9.5)	柱状部完形	にぶい橙	明褐灰	粗砂並、焼土塊、 黒雲母、石英少	良	摩耗のため不明、ナ デ、ヘラミガキ	ヘラミガキ、 ヨコナデ	外面赤彩
106	C19	A1	包含層	甕	(15.4)		(9.55)	口径2/12	にぶい橙	浅黄橙	粗砂並、焼土塊、 石英少	良	ヨコナデ、ヘラケズ リのちナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	外面煤付着
107	C20	A1	遺構検出	甕	(16.2)		(7.2)	口径2/12	橙	橙	粗砂多、礫少、 焼土塊	良	ヨコナデ、ケズリ	6条の擬凹線、 ヨコナデ	
108	C29	A	包含層	甕	(17.1)		5.25	口径2/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂・礫	良	ヨコナデ、ヘラケズ リ、指おさえ	7条の擬凹線、ヨ コナデ、ハケ?	
109	C36	B区	側溝 前年度排土	甕	(16.5)		(4.7)	口径1/12	浅黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、礫少、 焼土塊、石英	良	ヨコナデ、ケズリ	6条の擬凹線、 ヨコナデ	外面煤付着

第5章 総括

1. はじめに

本章では、これまで触れられなかった点を補足するとともに、遺構の切り合い関係、遺構の分類、遺物の時期などを整理し、遺構の変遷などを考えてみたい。遺構変遷試案を提示するにすぎないが、本遺跡を理解する一助としたい。

2. 基本層序と立地について

本遺跡の基本層序は平成21年度調査B区調査区壁土層断面図（第14図）で記録し、上層から盛土（厚さ約35cm）→旧耕作土（厚さ約20cm）→遺物包含層（厚さ約10cm）となり、地表から遺構検出面までの深さは約65cmであり、検出面の土質は灰褐色シルトである。検出面のおおよその標高はA区で8.5m、B区で8.7m、C・D区で8.7m、E区で8.8m、F区で9.0m、G区で9.4mであり、北東側程高くなる。とりわけE区からG区にかけて傾斜が急になる。

当時の地形を分布調査の試掘データ（第2図）から考えると、本遺跡の北東側は旧犀川の氾濫源と推定され、調査区より北東方面の基盤層は下っている。調査区より南西方面は試掘データから、滞水域の存在が推定され、旧犀川左岸の後背湿地と想定でき、調査区より南西方面の基盤層は下っている。以上のことから、本遺跡は旧犀川左岸の自然堤防上に立地すると推定できよう。

3. 遺構の切り合いについて

平成21年度調査B区の遺構の切り合いについて、整理してみたい。B区の子な遺構は建物に伴う周溝、土坑、柱穴であり、ここで留意したいのは、周溝間、周溝と土坑の切り合いである。周溝で切り合いが判明しているものは、SD1(古)→SD2(新)、SD10(古)→SD3→SD4(新)であり、周溝と土坑で判明したものは、SD6(古)→SK9→SK7(新)、SD4(古)→SK10、SD10(古)→SK11(新)である。これらの切り合いから、建物間、建物と土坑の新旧関係が類推でき、周溝と土坑の切り合いをみると、土坑の方が新しい。

4. 出土遺物について

主な遺物は弥生土器と古墳時代の須恵器であり、弥生土器は月影式を中心とするもので、一部法仏式にかかるものもみられる。古墳時代の遺物は遺物番号60～62の3点で、60はF区SD16下層出土で、古墳時代前期の赤褐色の土師器、61はF区SD16上層出土で、6世紀前半の南加賀産の須恵器片、62はF区SD15出土で、5世紀末～6世紀初め頃の完形の須恵器杯身である。遺物総数はパンケースで18箱あり、古墳時代の遺物は数点のみで、大半は月影式の土器である。ほとんどの遺構はこの月影式期に属するものであろう。また、平成21年度B区SK6、SD4から緑色凝灰岩の剥片がそれぞれ1点ずつ出土している。

5. 遺構について

(1) 平成21年度調査区

大きく分けて、月影式期、古墳時代前期、古墳時代後期の遺構があり、月影式期の遺構はC・D区以西に多く、古墳時代の遺構はE区以東にある。

月影式期の主な遺構は平地式建物、掘立柱建物、土坑であり、B区に集中している。B区では平地式建物の周溝と考えられる溝は4条あり、最大で4回建替えた可能性がある。また、B区の土坑は円形と楕円形の2タイプがあり、規模は長軸で118～205cm、深さは18～59cmである。B区SK1は直径205cm、深さ28cmを測る円形土坑で、B区の中では最も大きく、多くの土器が出土した。

月影式期の土器を比較的多く出土する土坑はC・D区にもみられ、SK13、SK15、SK20などが挙げられる。SK13より東側は弥生土器量も少なくなり、土坑もみられなくなることから、土坑群はC・D区のSK13を東限とする。

古墳時代の遺物が出土した遺構は、F区SD15・16であり、F・G区その他遺構からは弥生土器の摩耗した小片が多く出土し、遺構の時期を特定できる根拠に乏しい。E区SD13と平成22年度A区SX15、同B区SD5を一連のものとする、方形に回り、古墳周溝の可能性はある。F・G区SD15も円形に回る溝で、古墳周溝かもしれない。F区SD16についても、同区SX3・4と繋がるならば、古墳周溝の可能性はある。F区SD19は方形に回り、竪穴建物の壁溝と考えられる。

(2) 平成22年度調査区

平成21年度B区でみられたタイプの土坑を平成22年度A1～4区の範囲で、検出した。土坑群の東限はA4区SK3であり、A5区以東は不定形で浅い遺構が目立つ。

6. 遺構の変遷について

以上のことから遺構の時期について考えてみる。平成21年度B区の平地式建物の周溝出土土器と同じくB区土坑出土土器を比べると、土坑出土土器が全体的に新しい様相を備え、切り合いも土坑の方が周溝を切っている。平成21年度のB区の掘立柱建物・平地式建物、土坑群の前後関係は概して、建物が先行し、その後土坑群が出現するという流れは大筋で大過ないであろう。C・D区の土坑群も月影式期の中でも比較的新しいものが出土した。

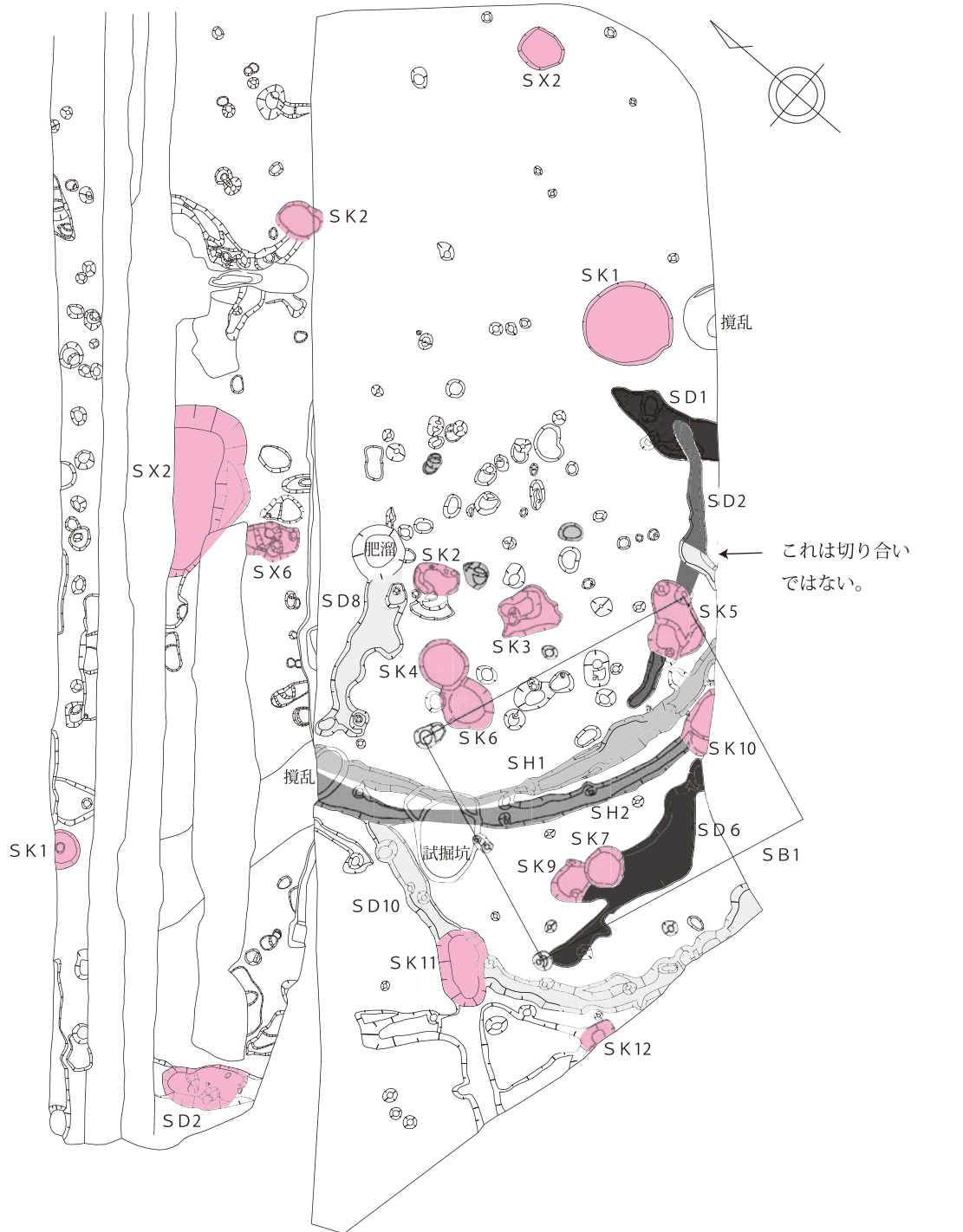
前述のとおり、F区SD16下層から60の古墳時代前期の土師器が出土し、同上層からは61の古墳時代後期の須恵器が出土している。出土状況から、上層出土の61はSD15を周溝とする遺構からの流れ込みと判断し、下層出土の60をSD16の時期を示す資料としたい。月影式期の集落が廃絶した後、SD16、SX3・4を周溝とする古墳時代前期の遺構、SD15を周溝とする古墳時代後期の遺構が築かれたものであろう。G区SD19を壁溝とする竪穴建物からは遺物が出ていないので、詳しい時期は分からないが、古墳時代の遺構と考えられる。

上記のことから遺構変遷を考えると、大きくみれば調査区南西端寄りに月影式期の集落が誕生し、建物が廃絶した後、月影式期の土坑群がC・D区まで拡がり、その後、調査区北東端寄りに古墳時代の遺構が築かれる流れになる。A区以西は旧犀川の後背湿地と考えられ、月影期の住居域は自然堤防上の後背湿地に近い位置に立地する。月影式期の集団はこの後背湿地で生業活動をしていたものと考えられ、後背湿地寄りに住居を建てたものであろう。これに反し、古墳時代の遺構は旧犀川の氾濫原寄りに位置し、対照的である。

参考文献

- 岡本淳一郎 2006 「周溝をもつ建物の分類と系譜」『下老子笹川遺跡発掘調査報告書 第五分冊 自然科学・考察編』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 川畑 誠 1992 「第6章」『横江』石川県立埋蔵文化財センター
- 浜崎悟司 1993 「加賀における集落における構成要素」『東日本における古墳出現課程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

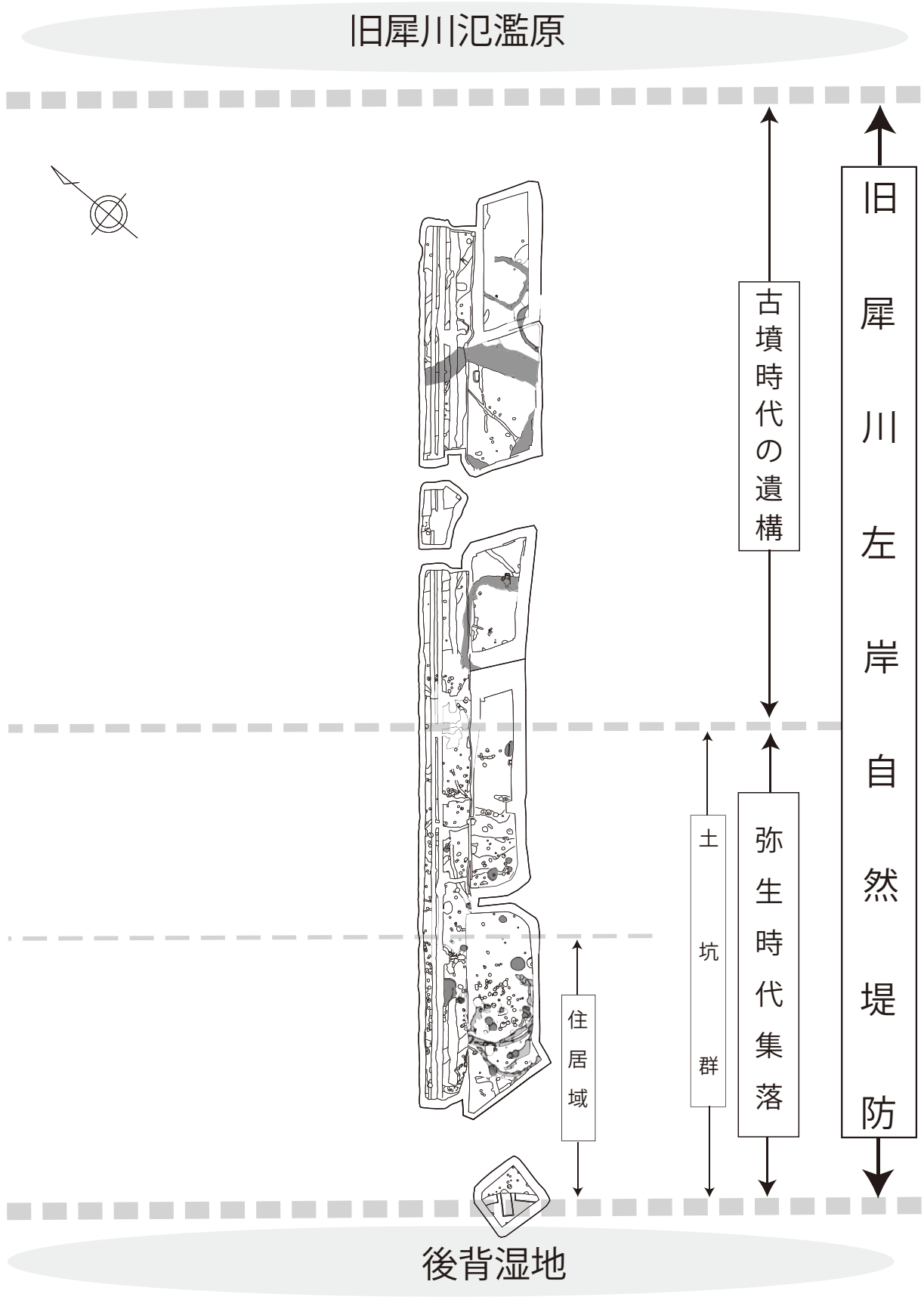
- 浜崎悟司^{ほか} 2009 「弥生時代の家と村」『石川県埋蔵文化財情報』第21号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 久田正弘 1991 「北陸西部における弥生時代の地域性について」『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報3』 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
 安 英樹 2009 「北陸における弥生時代中期・後期の集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集 国立歴史民俗博物館



(古) ■ = SB 1、SD 8・10 → ■ = SH 1 → ■ = SH 2 → ■ = 土坑群 (新)

※ ■ = SD 2、■ = SD 1・6 は平地式建物に伴う周溝かもしれないが、それらとSB 1、SH 01・02との新旧関係は不明だが、土坑群よりは古い。但し、建物と併存する土坑もあるかもしれない。

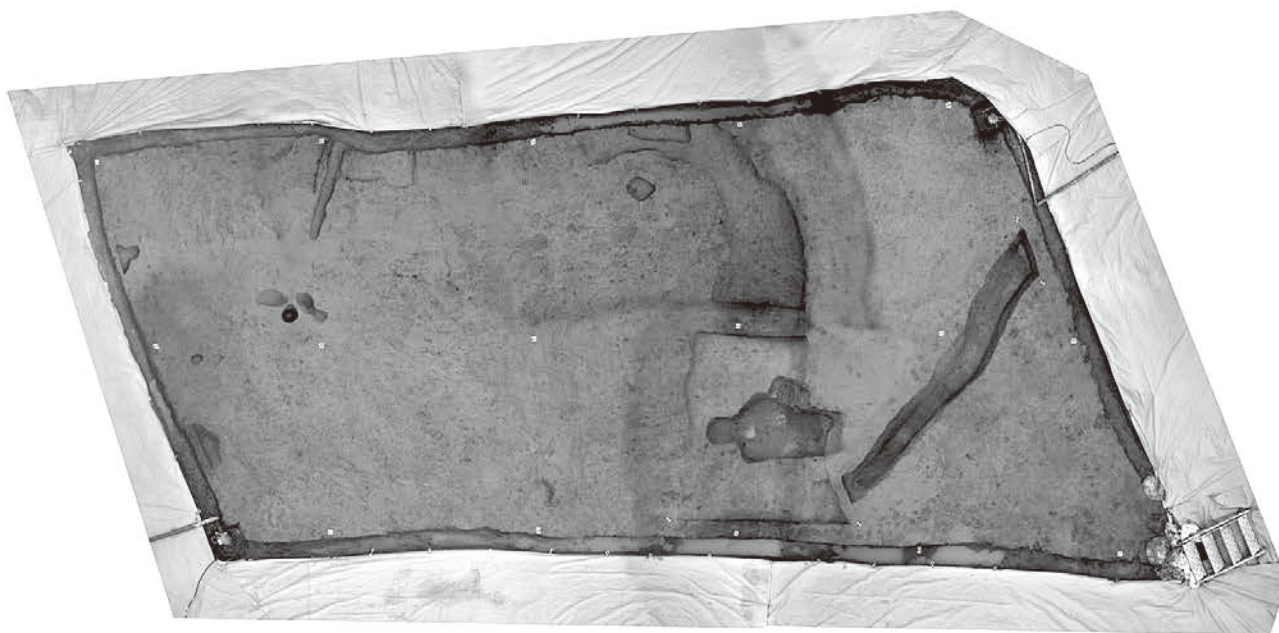
第27図 平成21年度調査B区遺構変遷試案 (S=1/150)



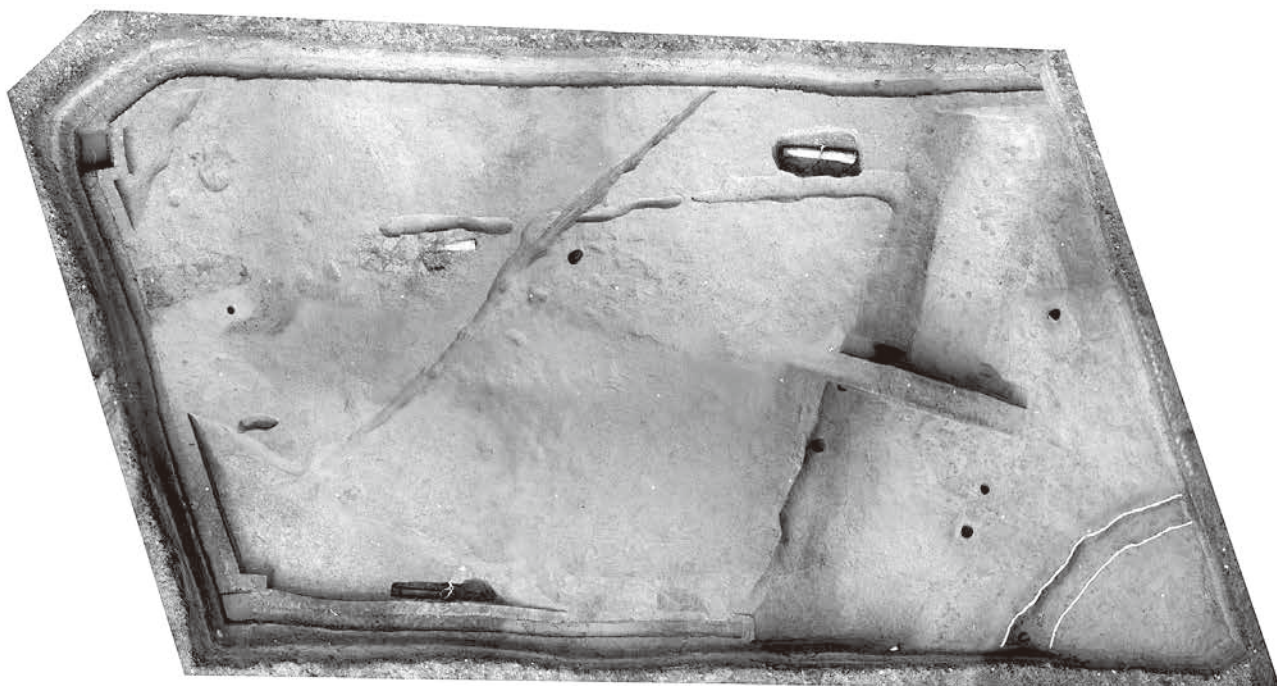
第28図 神田遺跡景観復元案 (S=1/800)



C・D区オルソ写真 (集成)



E区オルソ写真 (集成)



F区オルソ写真 (集成)

A区



B区



調査区オルソ写真（集成）



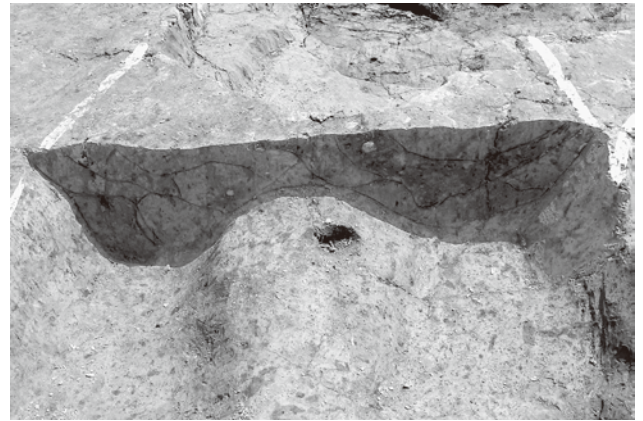
A区全景（北東から）



B区南部全景



B区SD03・04完掘状況



B区SD03・04西畦土層（西から）



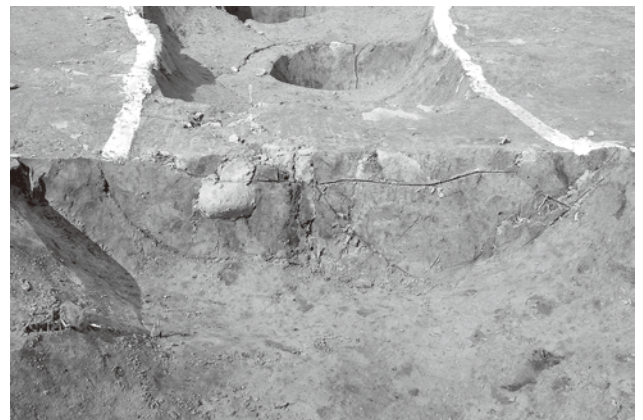
B区SD03・04東畦土層（東から）



B区SD08完掘状況



B区SD10完掘状況



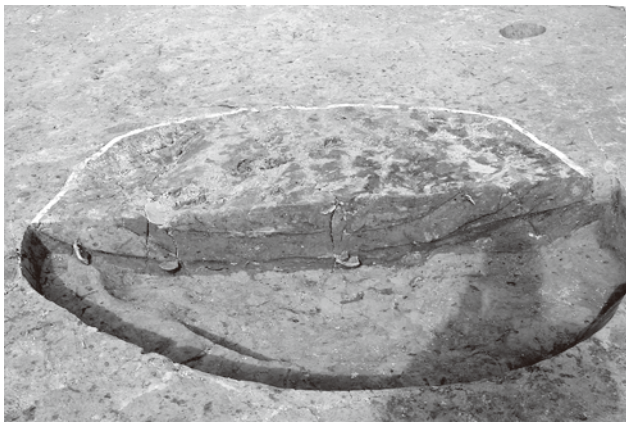
B区SD10土層断面



SK01完掘状況



SK01遺物出土状況



SK01土層断面（西から）



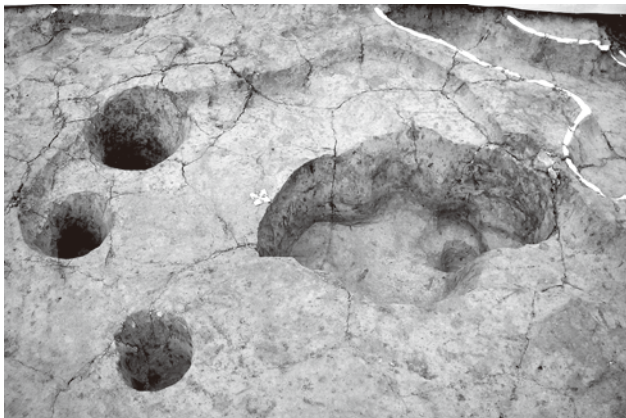
SK04周辺完掘状況



SK04遺物出土状況



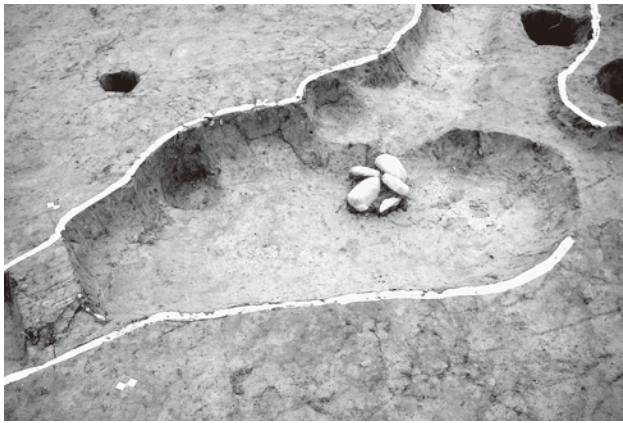
SK04土層断面（西から）



SK05完掘状況



SK07・09完掘状況



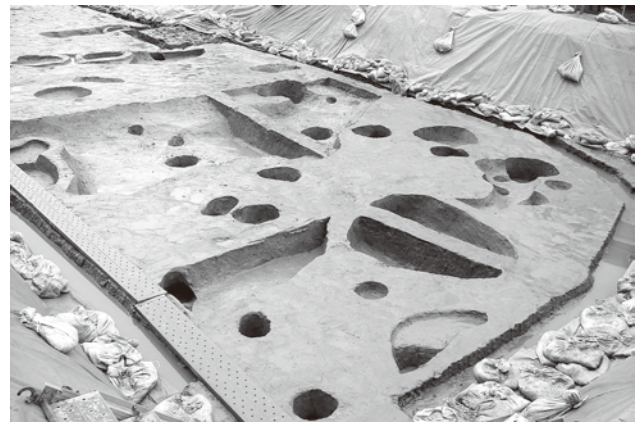
B区SK11完掘状況



B区SD11完掘状況



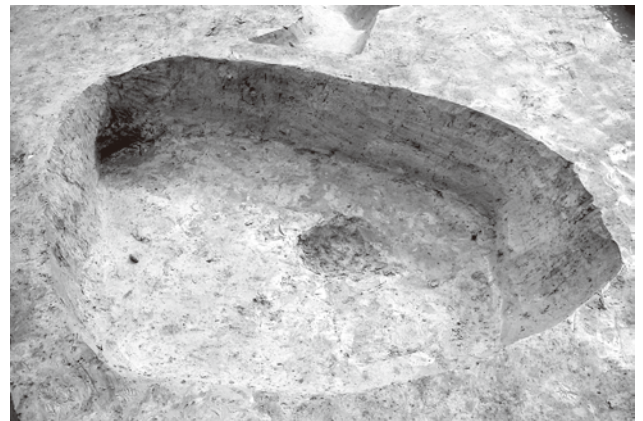
C・D区全景（南西から）



C・D区南部全景（西から）



C・D区SK13土層断面



C・D区SK15完掘状況



C・D区SK15土層断面



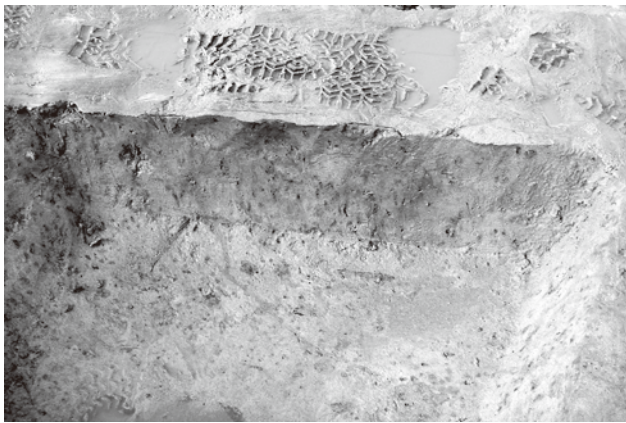
C・D区SK20遺物出土状況



C・D区SD22完掘状況



C・D区SD22土層断面



C・D区SD24土層断面



C・D区SD25土層断面



E区全景（南西から）



E区SD12完掘状況



E区SD13・14完掘状況



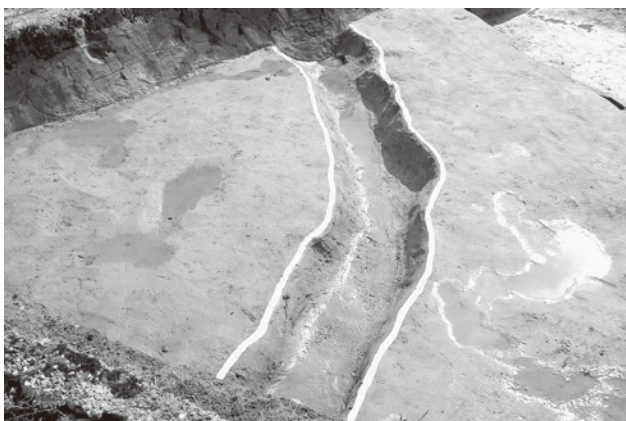
E区SD13・14土層断面



E区SD14土層断面



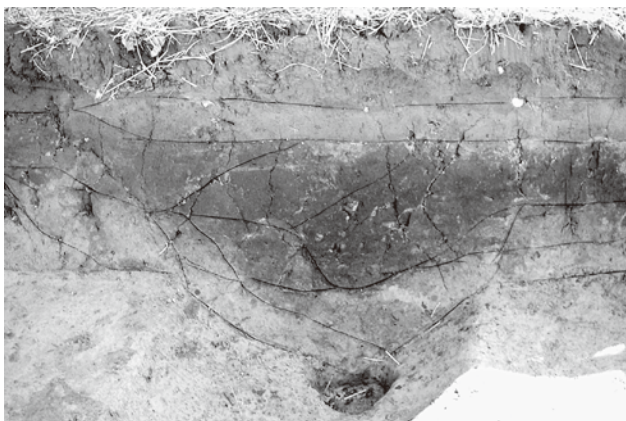
F区全景（北東から）



F区SD15完掘状況



F区SD15須恵器出土状況



F区SD15土層断面（東側調査区壁）



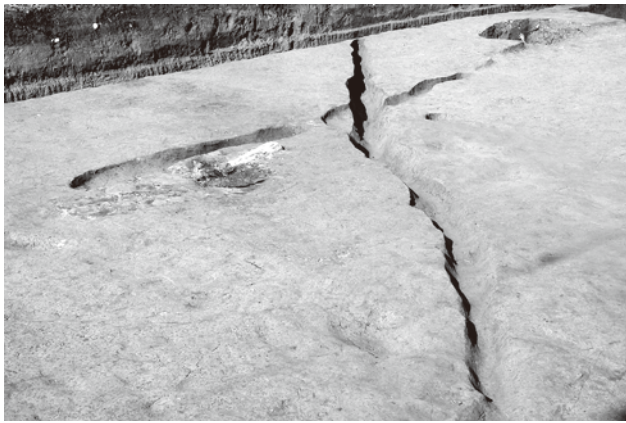
F区SD15土層断面（北側調査区壁）



F区SD16完掘状況（南東から）



F区SD16土層断面



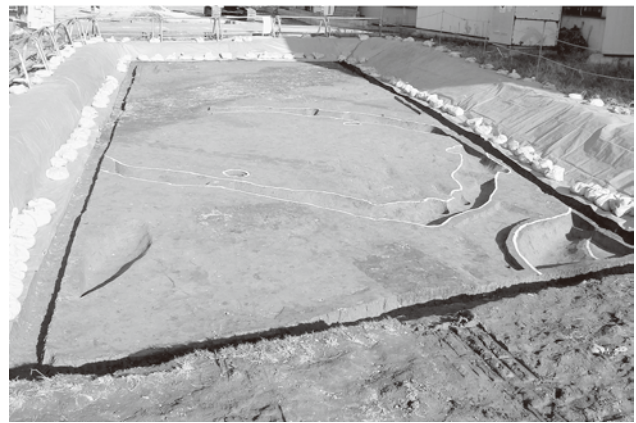
F区SD17・18完掘状況



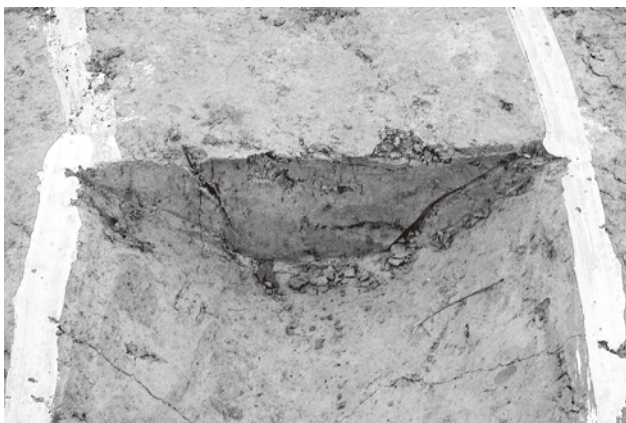
F区SX03完掘状況



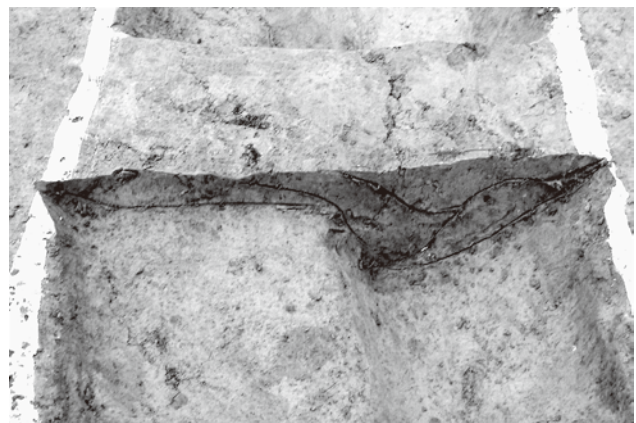
F区SX04完掘状況



G区全景（南西から）



G区SD19土層断面（西側）



G区SD19土層断面（南側）



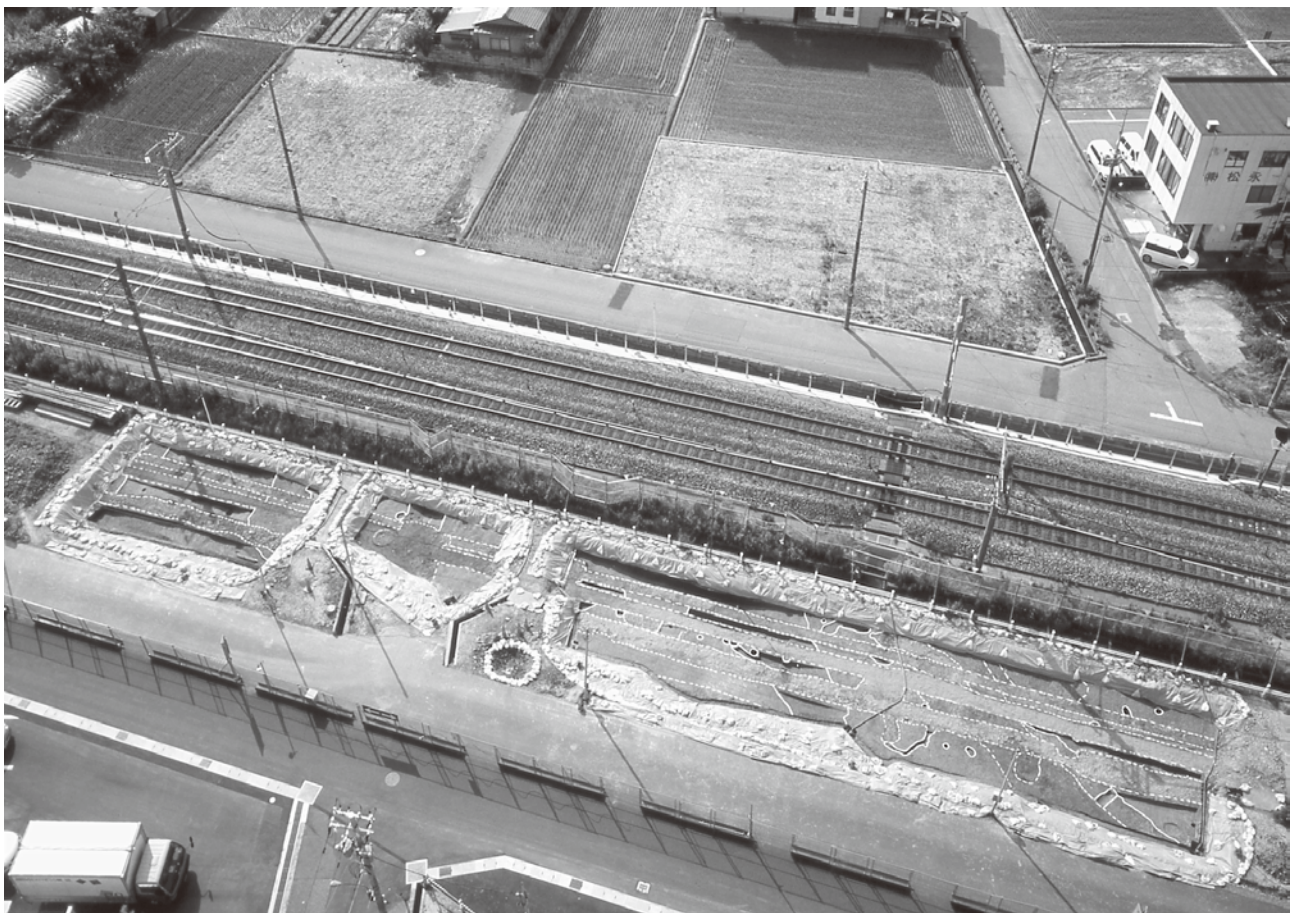
G区SD19土層断面（東側）



G区SD15完掘状況



A区全景（南西から）



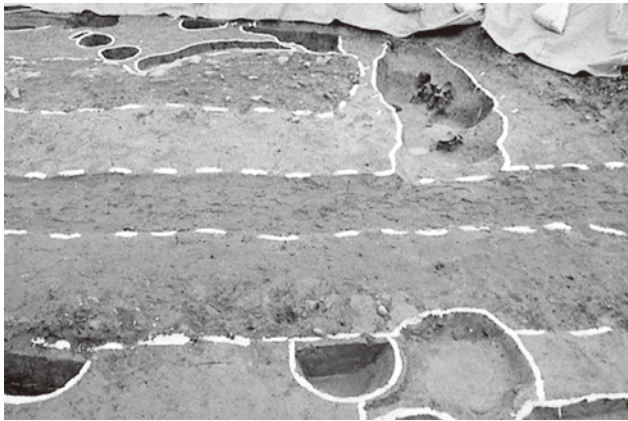
B区俯瞰（東から）



SD01・SK04完掘状況



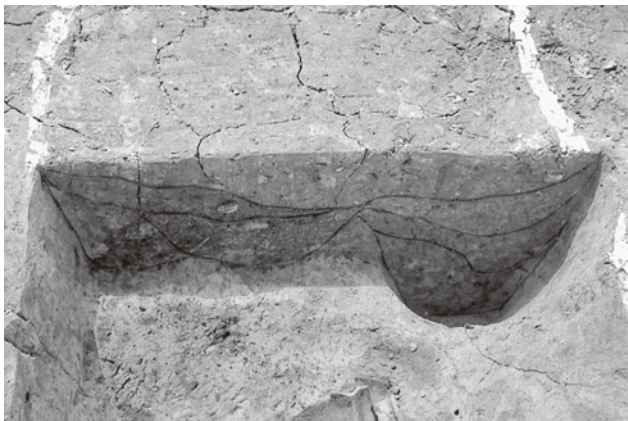
SD01土層断面



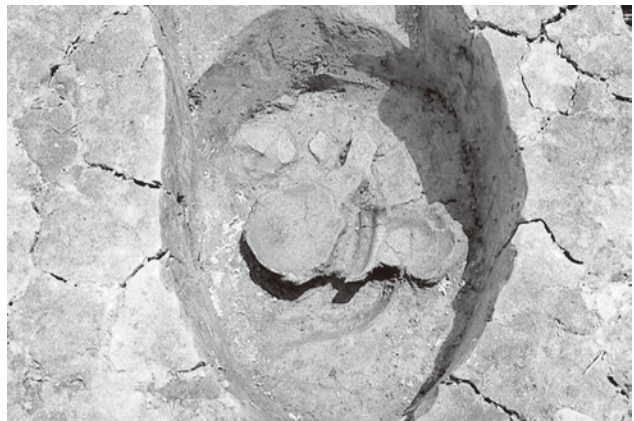
SD02完掘状況（西から）



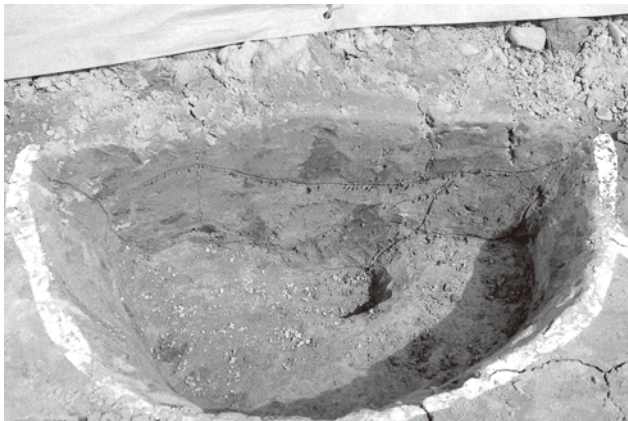
SD02遺物出土状況（西から）



SD02土層断面



SD04遺物出土状況



SK01土層断面



SK02土層断面



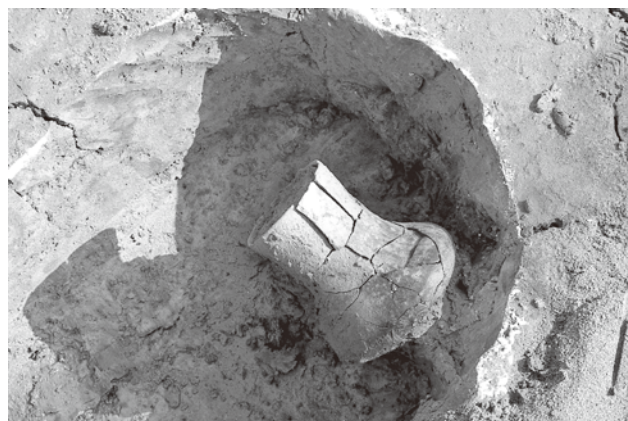
SK03土層断面



SK04遺物出土状況



SK04土層断面



SX01遺物出土状況



SX02完掘状況



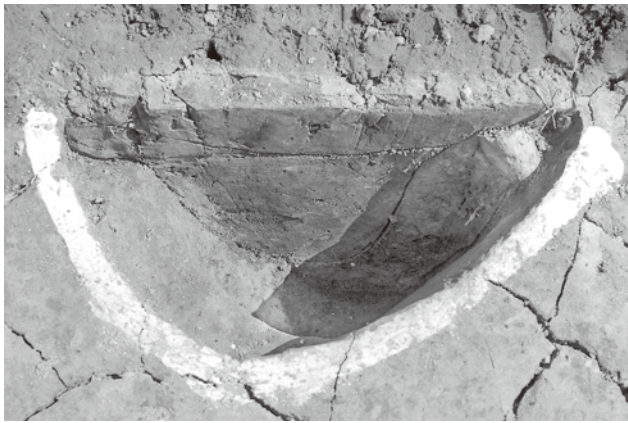
SX02土層断面 (南北畦)



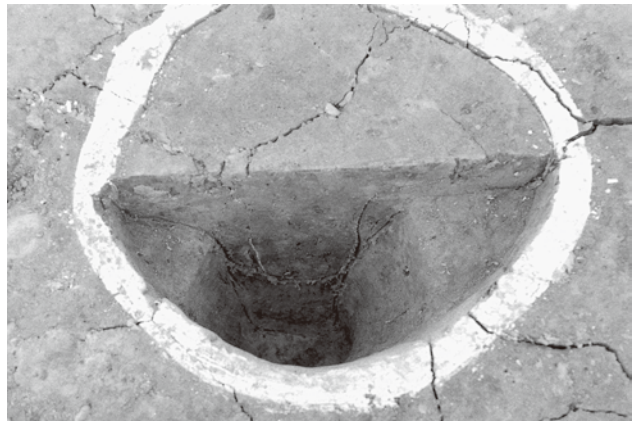
SX02土層断面 (東西畦)



SX13土層断面



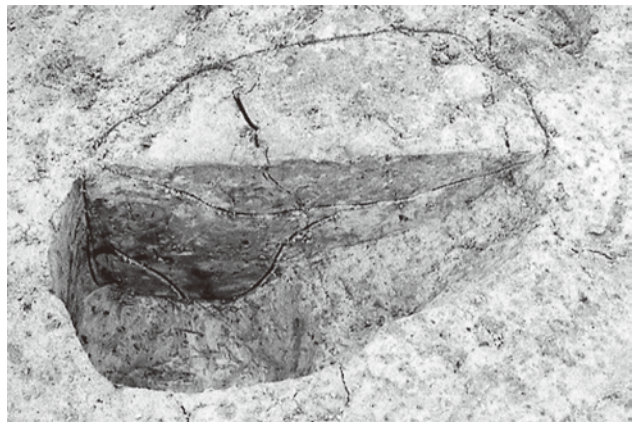
A区P01土層断面



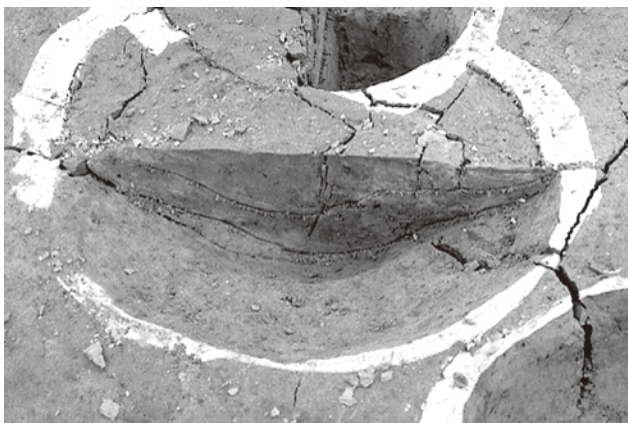
A区P02土層断面



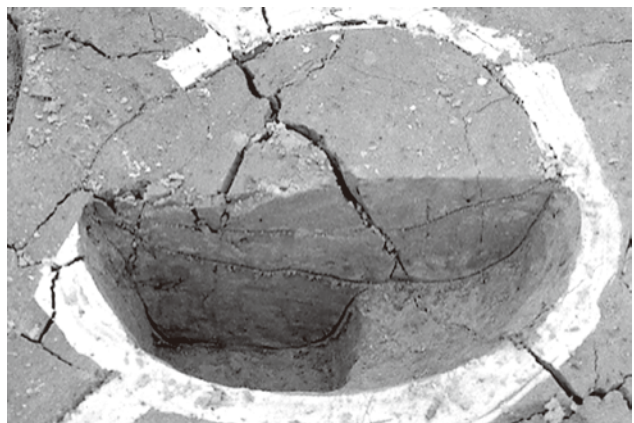
A区P32土層断面



A区P33土層断面



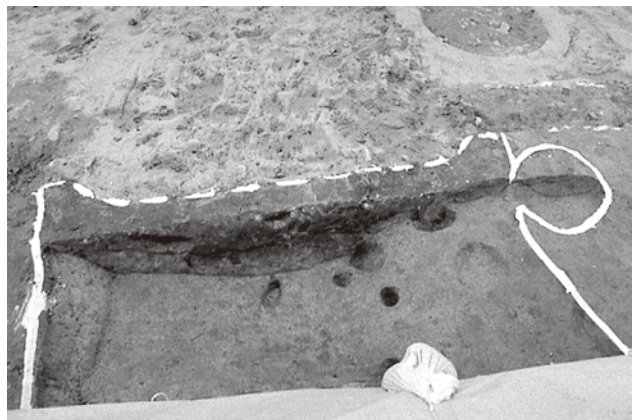
A区P54土層断面



A区P58土層断面



B区SD04~SX02完掘状況



B区SD07完掘状況



出土土器 (1~32)



出土土器・石器 (33~63)



出土土器・石器 (64~85)



出土土器 (86~109)

報告書抄録

ふりがな	かなざわし かなだいせき							
書名	金沢市 神田遺跡							
副書名	北陸新幹線建設事業(金沢・白山総合車両基地(仮称)間)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書3							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	荒木麻理子							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL (076) 229-4477 FAX (076) 229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2013年3月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かなだ 神田遺跡	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 かなだ 神田2丁目 地内	172014	128,200	36度 33分 38秒	136度 37分 57秒	20090821 ～ 20091027 20091209 ～ 20100121	1,520㎡ 1,040㎡	記録保存調査
						20100413 ～ 20100625		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
神田遺跡	集落跡	弥生時代	平地式建物、土坑、溝、柱穴、小穴	弥生土器、石製品				
		古墳時代	溝、柱穴、小穴	須恵器				
要約	旧犀川左岸の自然堤防上に立地する弥生時代終末期と古墳時代の集落である。弥生時代終末期の平地式建物が廃絶した後、同時期の土坑群が造られている。古墳時代の溝の中には、古墳の周溝の可能性のあるものもある。							

金沢市 神田遺跡

発行日 平成25(2013)年3月29日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842 (文化財課)

財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県中戸町18番地1
電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 ハクイ印刷